
めがりす！！

ジョナサン二世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めがりす！！

【NZコード】

N5075W

【作者名】

ジョナサン一世

【あらすじ】

けいおん！×Hースコンバットシリーズ

ヨーロッパ大陸に惨禍を巻き起こした大陸戦争。

その悲劇は、青春を謳歌すべき少女達をも巻き込んだ。

I S A F の英雄は勝利のために空を飛び、エルジアの少女達は守るべきものの為に空を舞う。

英雄と少女達が大空で出会いつき、全てが変わる

再び

感想大募集中。感想頂けると、作者は泣いて喜びます。

ぷるるーぐ

私が中学生の頃、空から巨大な隕石が降ってきた。

地球に直撃すれば、人類を滅亡させると言われた小惑星ユリシーズ

その小惑星を打ち碎くためにヨージア大陸の各国は、共同である兵器建造した。

ヨージア大陸中心部にある中立の小国家サンサルバシオン。
その郊外に聳え立つ、天を睨む8つの巨砲

その偉容は、私も当時テレビで見たのを覚えてる。

その名は、ストーンヘンジ。

小惑星ユリシーズがロシュ限界を突破し、大小多数の隕石となり地
球に降り注ぐ。

その隕石を打ち碎く任を、ストーンヘンジは負っていた。

そして、運命のその日

1999年7月8日

ロシュ限界を突破したユリシーズの破片は隕石となつて地球に降り注いだ。

私の住んでいる国

コージア大陸最大の軍事国家エルジア共和国にも、その破片は容赦無く落下した。

ストーンヘンジを持つとしても、隕石の驚異からは逃れられなかつたんだ。

結局人類滅亡は回避できても、大勢の人の命が失われた。

私の家族が住んでいた首都の近海に隕石が落下してお母さんが津波で死んだことも、私の記憶にはっきりと残ってる。

そして国境には、国を失った人たちが集まつた。

私が

「あの人達はどうなるの？」
と聞くと、エルジア共和国の軍人だつたお父さんは優しく私に言った。

「唯は気にしなくていいよ。」
と。

大陸最大の国家であるエルジアに、周辺の小国は難民問題を押し付けたんだ。

そしてこれが原因で、元々仲の悪かつたエルジアと周辺諸国との対立が決定的となつた。

それから程無くしてエルジア共和国は隣国のサンサルバシオンに侵攻、大陸戦争が始まつた。

周辺の小国との問題を武力で解決するという最悪の方法を、私たちの国は選んだんだ。

それに対抗して周辺の小国家はHSAFといつ連合を設立。

エルジアに対抗した。

でも、エルジアには戦争に勝利する秘策があった。

あの忌まわしい隕石を打ち碎くために造られた8つの巨砲、ストーンヘンジ。

隕石迎撃用に建造されたストーンヘンジは対空砲として運用した場合敵を超長距離から一方的に撃墜することができた。

戦争を勝利するためには、ストーンヘンジが必要だ

ストーンヘンジを接收するために、エルジア軍はサンサルバシオンに進行したんだ。

そして、陸軍の士官であるお父さんは戦地に赴き、家は私と憂の一

人になった。

春、高校に進学した私には、“りつちゃん”こと田井中律、“澪ちゃん”こと秋山澪。、“ムギちゃん”こと琴吹紬という友達ができた。

“あずにゃん”こと中野梓といつ後輩も出来た。
戦争なんて遠くの物語。
そう思っていた。

私が高校二年生の秋、ムギちゃんが軍の航空予備士官学校に行くことがわかつた。

ムギちゃんのお父さんは国を守るために自らの一人娘を国の盾にすることにしたようだ。

ムギちゃんを独りには出来ない。放課後ティータイムはいつも一緒にだから

大財閥を率い、大陸戦争中エルジアの兵器の70%を供給していたムギちゃんのお父さんの力があれば、私たちを軍の航空予備士官学校に転入させることは簡単だった。

そして私たち五人は、大空の戦いに身を投じることとなつた。

そつ言えば私は戦争が始まったその日、政府の報道官がテレビの中でいつも言っていたのを覚えてる。

「正義は我々にある。勝利の女神は必ずや、我々エルジアに微笑む
だろつ」

と書いてたのを。

おーたむれんだー もくせん！

：

2005年9月19日エルジア共和国首都ファーバンティ

「首都の空が敵だらけだよ…信じられない。」

私はそう呟きながら、航空予備士官学校にある滑走路から、朱に染まるファーバンティの空を見上げていた。

「まさかここは空をISAFの戦闘機が飛ぶなんてなあ…」

りつちやんもそう呟いて、空を見上げた。

茶色のショートカットに黄色のカチューシャを着けているりつちゃん。

いつもは笑顔を絶やさない彼女の顔も、今日ばかりは暗かった。

一人で見上げる空は、もつ私たちの空じゃない。

爆音を響かせながら私たちの頭の上を一機のラファールが飛ぶ。それはエルジア軍の戦闘機じゃない。

機体に描かれたスリーアロー・ヘッズのマークは、ISAF軍機の証だ。最早ファー・バンティの制空権は、ISAFの手に渡つてしまつた。

「り、律う…敵は、どのくらい飛んでるんだ?」

澪ちゃんは先程から聞こえる爆音に怯えていた。今も、本来ならばそこに在るべき航空機の無い格納庫の隅で震えている。
自慢の腰まである黒髪で顔は隠れてしまつて見えないが、恐らくは半ベソをかいてしまつていいだろう。

澪ちゃんは昨日も大変だったなあ。

「ママとパパに会いたい。二人が心配だ。」

なんて言い出したかと思つと、その田から大粒の涙が流れ出した。

いつもはややつり田がかつてゐるその端正な顔は、涙でボロボロだつた。

慰めるのが大変だったよ。

私たちの家族は、ISAF軍が首都への攻撃を開始する数時間前にコトブキ財閥の関係者が保護をしてくれた。

そしてそのまま中立国へ脱出させてくれることになつてゐる。

どの様な手段を使うのかは私にはわからない。

しかし、大国エルジアにおいて最大の規模を誇り、更には国外においても五指に入る大財閥であるコトブキ財閥のコネクションを使えば、民間人を中立国へ脱出させることなどわけないのだろう。

「…そう、わかった。ありがとう斎藤。

「ええ、わかった。あなたも気をつけて。」

みんな！

ムギちゃんがこちらに向かつて叫んだ。ウェーブのかかつたら金髪に近い明るい色のロングヘア。外国人の人形のようなその顔には、安堵の色が滲み出していた

「みんなの『家族は、無事に中立国へ脱出来たわ。』

「ほ、本当か？ムギ！」

澪ちゃんが隅から叫ぶ。先程の怯えよつからは想像もつかないくらいの明るい声だ。

りつちゃんも安心したように胸を撫で下ろした。

「あずにゃんの家族や憂も大丈夫なの？」

私の問いにムギちゃんは「もちろんよ。」と頷く。

ホッとした私に、ムギちゃんは言ひにくそうに「でも…」と呟いた。

「唯ちゃんのお父さんは、まだ行方不明なの。ウイスキー回廊での戦闘に参加したのは確かなんだけど、その後、行方が…」

行方不明

その言葉は、生きている確率が圧倒的に低いことを意味していた。

首都の防衛のため、エルジア軍が持ちうる総ての戦力を投入した最終防衛線ウイスキー回廊での戦車戦。

ISAFは、陸軍の支援のため、空軍を投入し、戦闘を有利に進めた。

その中には、あのリボンの戦闘機も居たらしい。

ストーンヘンジを破壊し、黄色の4を撃墜したあの悪魔。

結果、ISAF軍は戦車戦に勝利を納めた。

空軍は、リボンの戦闘機をはじめとしたISAF軍戦闘機に為す術もなく壊滅した。

たった一年前までコーギア大陸の空を支配していた私たちの国は、その支配権を奪われたんだ。

獲物を失ったISAFAF空軍は、エルジア陸軍に対して機銃掃射を行なつたと聞いた。

お父さんの生きている確率が圧倒的に低いことを、皆わかっている。先程とは違つ気まずい雰囲気

BGMは砲弾の炸裂音と空を引き裂くエンジンの音。そんな世界を破壊したのは、我が愛しの後輩だった。

「せ、先輩！」

皆が声の方向へ振り向く。

黒髪にツインテールのパイロットが息を切らせながらこちらに向かって走つて来ていた。「あ、あずにゃん！聞いてよ～みんなの家族は無事に…」

「そんなことはどうでもいいです！」

家族の無事を伝えようとした私の言葉を打ち切り、彼女、あずにやんこと「中野梓」は叫んだ。

皆は驚かない。航空予備士官学校に入つてからの彼女がどう変わつたかを、皆知つているから。

高校時代の純粋な彼女はもうはもう居ない。

首都中央スタジアムで一緒に演奏しようとした目標を語り合つた彼女の目には、もつ音楽は映らない。

「ジャン・ルイ教官が訓練生達を集合させています。律先輩はB班の班長なのに、何をしてるんですか！同胞達が命懸けで戦っているのに…」

制服の似合う少女はいまや、飛行服を着た曹長になっていた。彼女の瞳には、戦いしか映っていない。

家族の安否よりも、軍の通信を優先した彼女に、私は寂しさを感じた。

第2教導飛行団司令部！

「B班、リツ・タイナカ以下五名、集合しました。」

現在、航空予備士官学校の一室には教導飛行団の司令部が置かれている。

しかし、その司令部内の空気はいつもと違い重苦しい。

通信機からは、市街地で戦う部隊からの航空支援を要求する無線が入る。

それは、悲痛な叫び声にと形容するにふさわしい。

私は悟った。

私たち、出撃するんだ

最早、航空兵を養成する教導飛行団ですら、戦いに投入せねばならないのだ。

それが、どれ程異常なのか、鈍い私でもわかる。

恐らくは皆、感じているのだろう。

教導飛行団長は2日前に首都の最高司令部地下壕に出頭し、不在なため、指揮は予備士官学校長の大佐が執る筈だった。

しかし、窓際大佐の配置としてつづつつけである予備士官学校長の地位。

そこに座る大佐は毒にも薬にもならないとの評判であり、有事の際の指揮は執れていなかつた。

その他、実際の指揮は教官のジャン・ルイ大尉が執つてゐる。

今、私たちに烈火の如き表情で近づいてゐるのは、予備士官学校長ではなく、ジャン・ルイことジャン・ルイ・フローベル大尉その人だつた。。

「貴様等、遅いぞ！何をしていた。」

りつちゃんは答えられない。

そりやそうだ。家族が中立国へ脱出出来たかどうかの確認をしていて遅れたなどと言えば、どうなるか分からぬ。

「『もるりつちゃんに業を煮やしたジャン・ルイ大尉は「もういい」と言と、私たちに椅子に座るよつに促した。

私たち五人は空いていたパイプ椅子に座る。

私たちが座るのを確認したジャン・ルイ大尉は先程とは違い、静かに話しかけ始めた。

「現在、首都の制空権は、ISAF軍の手中に收まりつつある。」

それは誰の目にも明らかだった。

格納庫の入り口で空を見上げていたけど、エルジアのラウンジテルを付けた飛行機は、殆ど飛んでいなかつた。

空を駆け抜けるのは、三つの鎌のシンボルを付けた飛行機ばかり：

私たちには、その現実が堪えた。

大陸の空はストーンヘンジによって打ち砕かれた。

ISAFはその、打ち砕かれた空の欠片を拾い集めた。

そして、かつてストーンヘンジがそうしたように、彼らもまた私たちの空を打ち砕いた。

私たちには、碎かれた空をもとに戻せない。

ソラノカケラは、もう拾い集めることは叶わない。

放課後の音楽室

五人で見た夕焼け空

もうこの空は、私たちの空じゃない。

三つの鎌が空を碎き、リボンの死神が命を奪つ。

七つの大砲が支配していた空よりも、もっと危険な空。

いま、それが私たちの上に広がってる。

この空には、大勢の勇者の叫びが、木靈している。

そう思つと、何故か私は体が震えた

ジャン・ルイ大尉の口からは、あまり景気の良いことは出なかつた。

ISAF上陸軍に艦砲射撃をしていた戦艦が

ISAF海軍に一矢報いんと出撃した駆逐艦が

首都の上空制圧を担当していたバリー隊が、壊滅したこと。

戦闘が始まったとき、ジャン・ルイ大尉は、「安心しろ。バリー隊が上空制圧をする。」なんて言ってたけど、それは叶わなかつたみたいだ。

さらに絶望的だったのは、友軍と合流を図った戦車隊が、ジヨンソン記念橋の崩壊で合流できなくなつたことだ。

戦車隊が合流に失敗したことで、私たちの敗北が決定した。

その事実は、私たちに重くのし掛かる。

ジャン・ルイ大尉は、そんな私たちを見回すと、口を開いた。静かに、そして力強い口調で。

それは、未だ諦めを知らない口調だった。

「首都の南方、トウインクル諸島に、建造中の兵器がある。」

建造中の兵器

皆がその言葉に耳を惹かれた。

私たち五人は勿論、意氣消沈し頃垂れていたパイロットも顔を上げた。

「し…新兵器ですか。」

誰かが声をあげる。

それに、ジャン・ルイ大尉は答えた。

「ああ、名はメガリス。」

メガリス

太古の巨石遺跡の名を冠する新兵器は、私たちに微かな希望を持たせた。

「その兵器は、衛星軌道上のユリシーズの破片を落下させる。ストーンヘンジをも上回る、我がエルジアの最終兵器だ。」

淡々と語る口振りに似合わない内容。

衛星軌道上の隕石の破片を落とさせるなんて、普通じゃない。

「そのような兵器… 一体いつの間に…」

ムギちゃんが至極当然の質問をする。

「かつて、コーギア大陸の諸国を席巻したクーデターがあった。そのクーデター軍は、北方の島国ノースポイントに司令要塞を構えていた。名はイントレランス。」

私たちが生まれる少し前に起きた事件だ。予備士官学校でも、軍事史として習つた。

「わが共和国も、統合軍として鎮圧に参加し、クーデターは鎮圧された。メガリスは、そのイントレランスの技術データを基にして、共和国が新たに作り上げた超兵器だ。」

超兵器

すごい兵器といふことは、私にもわかる。
でも…

「あの…」

私は手を擧げる

その途端、皆の目が私に向かられる。

「どうした、ヒラサワ少尉。」

私は、一つの疑問を大尉にぶつけた。

恐らく、これはみんなの疑問。そしてみんなは、この疑問の答えを予想している。

その答えとして相応しい行動は、一つしかないから。

「大尉は何で、私たちにその… メガリストのことを教えたんですか。」

その質問に、大尉は目を細める。

じつと私を見つめた後、「フウ」と息を吐く。

「決まっているだろ?」

そう言い、イスから荒々しく立ち上がる。

「我々は、メガリストを起動させる。」

予想道理の答えが返ってきた。誰も驚かない。
皆の視線は相変わらず大尉に集中している。

それを意に介さず、大尉は続ける。

「コリシーズの破片を落とさせる。ISAF軍に、コリシーズの悪夢を見せてやる。」

コリシーズ

ユージア大陸に落下し、何万人もの人の命を、私の家族を奪つた隕石。

まさか、再びあれの名を聞くなんて……あれが落ちる姿を見る事になるなんて思つてもみなかつた。

新聞の中の戦争

テレビの中の戦争

教科書の中の戦争は、もっとスマートで、美しかつた。

エースと呼ばれる英雄たちが、青空を駆ける。

ウスティオの鬼神

ベルカ藍色の騎士団

エルジアの黄色中隊。

私の知っている戦いは、もつと綺麗だった。
プライドとプライドがぶつかる騎士の戦い。

まるで映画かおとぎ話のナイトの一騎討ちを見ているかの様に考え
ていた。

でも、現実は違った。

地上軍に機銃掃射を行うパイロット。

非戦闘員のいるビルに砲弾を撃ち込む砲兵隊。

遂に隕石まで降らせようなんて…

今、私の前に広がる戦争は醜く、血生臭い殺し合い。

美しさの欠片も無い、ただの殺し合い…

「我々はメガリスを起動させる。1930に全員出発だ。ハーキュリーズを準備しろ。」

1930…

丁度一時間後だ。

僅か一時間後には私たちは格納庫のハーキュリーズの中に詰め込まれる。ギー太は持つていけないなあ、なんて能天気な事を考えられる私はある意味大物なのかもしれない。

「いいか、全員直ちに準備を…」

大尉がそこまで言いかけたとき、本部のドアが開いた。

ふと、私は部屋に掛けられている時計に目をやつた。

銀縁の、丸い時計だ。

時計は、1933を示していた。

「申し訳ありません。」

ドアの前に立っていたのは、一人の兵士だった。

顔はかなり焦った様子である。

「大尉、あの…総司令部より士官が到着していますが、その…」

口は吃り、話の内容は要領を得ない。

「一体どうしたんだ。話が要領を得ない。」

「私が代わりにお話するわ。」

兵士を押し退けて、一人の士官が入ってくる。

薄い茶髪のショートカット。

メガネが知的なイメージを醸し出す彼女を、私は知っていた。

否、私だけではない。

桜校軽音部のメンバーは全員知っていた。

りつちゃんも、澪ちゃんも、ムギちゃんもあずにゃんも皆…

「の…和ちゃん！」

私の声が彼女に聞こえたかは分からぬ。

ただ、視界に[写]る幼馴染みは声が聞こえていないかのように私を無視した。

「第2教導飛行団総飛行隊長、ジャン・ルイ・フローベル大尉です
ね。総司令部付仕官のノドカ・マナベ中尉です。」

私の幼馴染みは、そう言って大尉に敬礼した。

大尉は訝しげに彼女を見つめる。

「総司令部の中尉が態々この様な場所までご苦労ですな。生憎、我々は忙しい。大した用で無いならば、帰っていただけますかな。」

そう言い放つ大尉の目には、敵意にも似た意志が感じられた。

それは、前線で血を流す部隊指揮官の大尉と、司令部の要塞で指揮を執る仕官の間にある壁が生み出すものに他ならない。

田の前の一人は、田に見えない分厚い壁で仕切られている。「私は総司令部より命令をお預かりして参りました。」

大尉にそう告げる和ちゃんは、私の知っている和ちゃんでは無かつた。

容姿、仕草は昔と何ら変わらない。

只、私の知る彼女はもっと優しく、温かかった。

「命令だと。」

大尉の鋭い目が和ちゃんを捉える。

「はい、明日9月20日1200をもって我がエルジア共和国はI-SAF軍に降伏することが決定しました。」

え…

私は、眼前の幼馴染みの口から発せられた言葉の意味を解らずにい

た。

降伏？

ISAF軍に？

エルジアは、国民はどうなるの？

私たちは？

リボンは…死神はどうなるの？

「それって一体どうこう」と。

私が立ち上がる。

しかし、和ちゃんは私には目もくれず大尉に話し続けた。

「この様な結果になり、誠に残念です。しかし、これも国家国民のため。了解して頂けますね。」

「…」

大尉はただ黙つたままだった。

「まで、和。」

突然私の右隣より声がした。りつちゃんだ。

私の隣に座っていたりつちゃんは、立ち上がり和ちゃんを見据える。

皆の視線がりつちゃんに集まる。それは、私が大尉に質問をしたときと同じだった。

和ちゃんは横田にりつちゃんを見て

「何かしら、田井中中尉。」

と冷たく言い放った。

「その命令、本当に総司令部からの命令なのか。」

「ええ、正真正銘本当に総司令部からの命令よ。ほい。」

和ちゃんは鞄より命令文書を取り出す。

そして私たちのところまで近付くと、りつちゃんに命令文書を差し出した。

りつちゃんはそれをむしり取り、それに目を通す。

「…おー。」

りつじやんが皿を細める。

「何かしら。」

「何で」の文書、発令者が総司令官じや無くて、参謀次長なんだ。」

「ああ、それね。」

フフ、と下を向き笑うと和むじやんは顔を上げる。

「高級幕僚達は、大半がへりで脱出されたわ。総司令官殿も、御婦人と御息女をお迎え次第脱出予定よ。」

和ちゃんの口から出た言葉は、司令部の面々は色めき立った。口々に罵声が發せられる。

「黙りなさい！」

和ちゃんは彼らを一蹴すると、再び話始めた。

「高級幕僚達を乗せたヘリは殆どが撃ち落とされたわ。総司令官殿も無事脱出出来るかは分からぬ。」

皆黙つて聞いている。

「参謀次長殿は事後処理のために自ら総司令部に残られた。そしてISAF軍に降伏することを決定したの。」

衝撃的な事実が和ちゃんの口から淡々と語られる。

今まで多数の兵士達を死地に駆り出した指導者達が、今また私たちをスケープゴートにし逃亡を図ったなんて。

しかも、総司令官ですら無事脱出出来るか分からぬ状況だなんて…

「ああ、それと。」

和ちゃんが思い出したように呟いた。

「第2教導飛行団長殿も、ヘリで脱出を図られたわ。でも、脱出直後に撃墜されたみたいだけね。」

皆言葉が出ない。

命を賭けて守り抜く筈の祖国の敗北

信じていた指揮官の敵前逃亡

今まで私たちに積極的攻勢を指示していた軍指導者達が国を、私たちを見捨て逃亡したことは、非常にショックな事実だった。

りつりやんは命令文書を手に持ち呆然としている。

「皆わかつたかしら。これが現実、今のエルジアの状況よ。それと律、その文書を返して貰つわよ。」

やつひつて和ちゃんは右手をりつりやんの持つ命令文書へ伸ばす。

「... -?」

伸ばされた和ちゃんの右手が、ジャン・ルイ大尉の手に掴まる。

ジャン・ルイ大尉は、いつの間にか私たちの席の近くにいた。

「.....その手を放して頂けませんか。」

しかし大尉は手を離そうとしない。

和ちゃんは手を振り払う。

「一体何のおつもりかしら。」

溢れる敵意を隠そつとせず、大尉に向ける和ちゃん。

「私はその文書を返して頂きたいだけなのですが。」

「この文書はまだお返しするわけにはいかん。現在、この隊の最高指揮官は予備士官学校の大佐殿だ。大佐殿に文書をお見せする。」

大佐殿

それを聞き和ちゃんはほくそ笑む。

和ちゃんも大佐の評判は知っているのだろう。

「ええ、よろしいですよ。あの弱腰で、凡庸な昼行灯の大佐殿にお見せしても。」

それを聞き大尉は顔を歪めるが、直ぐにいつもの表示に戻り私たちを見た。

「私は命令文書を大佐殿にお見せしていく。お前達は準備をしろ。一時間後にここに再度集合だ。ジーン、マナベ中尉を来客室にお連れしろ。」

そう言つて大尉は部屋を出る。そして、それに続くよつてジーン中尉と和ちゃんが退室した。

ジーン中尉は、ジャン・ルイ大尉よりも少し年下の教官だった。その彼に案内されて、和ちゃんは退室していった。

残された皆は各自顔を見合させた後、次々に退室した。

そして部屋には、私達五人になった。

「…どうする。」

「つむぎちゃんが座く。」

「やつぱり、部屋に行くか。準備もしないと。」

答えたのは澪ちゃんだ。

私たちは特に返事もせず、お互に顔を見合させて立ち上がった。予備士官学校舎の横に併設された兵舎。

私たちの部屋は二つに別れてるが、隣同士だ。

「じゃあ暫、必要最低限の物だけを持って集合だ。」

「つむぎちゃんが言つ終わつたのを合図に、部屋に入る。」

私とムギちゃん、あずこちゃんが同じ部屋だった。
「つむぎちゃんと澪ちゃんは言つに及ばず、だ。」

「何を持つていけばいいのかな。」

そう言いながら机の引き出し、共同で使っているクローゼットの引き出しを漁る。

背嚢には救急用具、水、携行食料が入っている。

その中に数枚の衣類を入れる。

ふとムギちゃんを見る。

ムギちゃんは一冊の本を見つめていた。

愛しき薔薇への手紙

ベルカ戦争で戦死した一人のベルカ人工ースパイロットが、家族に宛てた日記の内容を纏めた本だ。

この学校に入つてから、ムギちゃんは良くこの本を読んでいた。

⋮

「この本ね、マンフレート・ネッシャーといつパイロットが書いていた日記の内容を纏めた本なのよ。」

訓練の休みの日、皆で来ていた公園のベンチ。

りっちゃんが発した「何なんだ、その本。」といつ言葉からムギちゃんは自分の読んでいた本の説明をする。

「1995年4月15日、自分が戦死する日まで、彼は自分の妻子に宛てたメッセージを日記に綴っていたの。」

そう言ってムギちゃんは、私に本を手渡す。

私はパラパラとページを捲る。

そこにあつたのは、家族を思つ父の愛。

大空の戦いに身を投じるパイロットは、地上では一人の父親だった。

「…私ね、マンフレート・ネッシャーの家族が羨ましいの。」

ぽつりとムギちゃんが呟く。

え…と澪ちゃんが驚いた声を出した。

「私の父は、家族を顧みる」とは無かつた。父の頭の中は、会社と…このエルジアの未来だけ！」

普段目にすることの無い、ムギちゃんの怒り。

誰一人として、声を発することが出来ない。

「私は只…家族に目を向けてほしかったの。」

消え入りそうなムギちゃんの呟き。
いつも皆を笑顔にするその脣からは、今日は悲しみの叫びしか出でこない。

「マンフレート・ネッサーは、自分が死ぬかもしれない環境のかで、家族を想っていた。」

それはさつきの本を読めばわかる。あの本に書かれていた内容は、家族を想う父の気持ちだ。

「私の父は、彼みたいにいつ死ぬとも知れない身の上ではないわ。只イスの上に座り、書類にサインをするだけ。たまに外に向かえば、国家主義者のパーティで演説…この様な毎日の中で、30分でもいい…何故家族に目を向けてくれないの…」

静かな公園に響くのは、ムギちゃんの啜り泣く声。

誰も声を発しない。

「大丈夫さ」「お父さんはきっとムギちゃんに田を向けてくれる」

なんて無責任な事は言えない。

実の娘を国の盾にするという事を平然と行う父親。

その娘に、あなたの父親はあなたを愛しています、等と言えるだろうか。

憎らしいほどに晴れ渡っている空。

この公園には、私たちの他は誰も居なかつた。

静かな公園には、一人の少女の啜り泣く声しか聞こえない。

私たちは、ムギちゃんが泣くのを只黙つて見ているしか無かつた。

あの時の本

あれからも時々、ムギちゃんはその本を読んでいた。
皆に見せる笑顔、しかしその本を読んでいるときは、寂しそうな顔
を見せる。

ムギちゃんは、本を読んでもうときはマンフレート・ネッラーの家
族の一員になつた氣がするのだろう。

戦地に在つて尚家族を想つ優しい父。

しかし、現実の父は家族を顧みることは無い冷酷な父。

…ムギちゃんは、マンフレート・ネッラーの家族に嫉妬してゐるの
かも知れない。

自分の様な境遇の者がいるなかで、父に、夫に愛された幸せな者が

居たこと。

「先輩、準備出来ましたか。」

あずにやんの声で私は現実に引き戻される。
気付くとムギちゃんも出発準備を終えていた。

私も慌てて準備を終える。

部屋を出ると、一度遠いちゃんとひかりちゃんも部屋を出ていた。

「…まだ、時間があるな。」

りつりちゃんが腕の時計を見ながら囁く。

「じゅあ、こつものあわいに行きますか。」
とあずにやん。

こつものあわいとは格納庫の事だ。

訓練の合間、私たちはよくあわいに集まっていた。

一緒に話をしたり、只空を見上げたり。

今日のよつな日も私たちはそこへ集まる。
私たちの居場所はそこしか無いのかと、乾いた笑いが込み上がる。

皆の足はあわいへ向かう。

私は、ふと後ろを見た。

開け放されたドアの向こうに見える私たちの日常。

軍隊といつ日常とはかけ離れた世界の中にあつた唯一の日常世界。

私たちは今から、それすら棄てる。

その先に何があるのか

それは分からない。

只、一つ分かることがある。

私たちは

もう戻れない。

格納庫の周辺には、人影は疎らだつた。

ライフルを構えた歩哨が周囲を警戒している程度だ。
私たちが格納庫の近くのベンチに腰かけると、その歩哨は顔をしかめる。

しかし、私たちが空軍の予備士官、下士官だと分かると慌てて敬礼した。

相変わらず上空はISAFの戦闘機しか飛んでいない。

明日の降伏情報が伝わったのか、市街地の方でも散発的な戦闘音しか聞こえない。

大部分の部隊は投降してしまったのだろうか。

大本営は陥落寸前の筈だ。

と言つことは、市街地より交代する部隊はここ 航空予備士官学校に集結するだろつ。

降伏を良しとしない兵士達が、死に場所を求めるために…

私がそんなことを思つていると、ふとつひちゃんが

「なんかさ、あんな歩哨を見つけると、サンサルバシオンを思い出すよなあ。」

と言ひ空を見上げた。

「サンサルバシオン…ですか。」

あずにゃんが遠い田をする。

ほんの数カ月前なのに、私たちには何年も前の話の様だ。

大陸戦争初期に、私たちの国に蹂躪された中立国家サンサルバシオン。

この戦争の引き金となつた兵器『ストーンヘンジ』を自国内に保有していた国家。

私たちは、そこに居たのだ。

：

2005年1月

I S A F 軍が大陸に進行してきた事で軍部が大騒ぎしているなか、私たち予備士官はサンサルバシオンのサンプロフェッタ空港に降り立つた。

目的は、サンプロフェッタ空港に居を構える空軍での実施研修であつたが、私たちにすれば大陸交通の要であるサンサルバシオンに旅行に来たような気分だった。

それがいけなかつた。

予備士官らは初日は説明を終えた後は自由時間となっていた。私たち5人はその自由時間中に市街地に出て、道に迷つた。

占領下とはいえ、馴れない土地である。

たまに立っている強面の武装憲兵に道を聞くのも躊躇われた私たちは、市街地を闇雲に歩き回り時間を浪費していくた。

「おこ、おつかれの時間じゃなにのか。」

澪ちゃんが泣き声で囁く。

「もう20時よ…といへば過ぎたわね。」

ミキちゃんが腕時計を見ながら苦笑する。

点呼の時間は19：30だからもつ過ぎたこと。

「かとこいつこれ以上遅れるのもなあ…ビリする、唯。」

りつりやんの言葉だ。流石に一つものお気楽とは感じない。

「ねえ、あのお店で聞いてみよつか。」

私は田に付いた一件の店を指差す。

洒落た店だ。見た感じ、カフュだらうか、と思つてみると看板には
CAFE PUB & RESTAURANT SKY KI
D と書いてある。

「あんまつああこつ店には入りたくないけど、仕方無いが。」

澪ちゃんはあまり乗り気では無さうだが、この際仕方無いかと言
う感じだ。

「私、夜のパブに入るのが夢だったの。」

ムギちゃんは少々変わった自分の夢を語った。

「まあ鬼に角行きましょう。これ以上遅れると、大変な事になりますよ。」

やつ語ったあすこちゃんはペコペコしていた。

生真面目な彼女は先程からかなりイライラしている。まあ、普段より教官らに目を付けられている私たちの中で彼女は成績が良かつた。

そんな彼女からしてみれば、今回の遅刻で自分の評価が下がるのは面白くないのだろう。

私たちは彼女に促され、急ぎ足でその店 スカイキッド に向かった。

「こひらしゃいませ。」

「ひるの店主だらうか。」

中年の男性が私たちに向かって声をかける。

「ほお…女の子が士官とは。珍しいな。」
その男性は、私たちを物珍しそうに見つめる。

そして

「よひるや、スカイキック。」注文は。
と。

とても道を訊きに来たとは言ひにくい。

澪ちゃんが私の背中を突く。

私が訊けという意味か。

そんな男性に見えない範囲でのやり取りをしてくると、業を煮やした者が一人いた。

あずにやんだ。

そして、彼女は私たちより一歩前に出、言い放つ。

「私たちひるに食事をしに来たのではありません。」

店主ひしき野性せ困惑の表情を浮かべる。

その後、何か覚悟をしたような顔をする。

しかし、あず「いや んはそれに構わず口を開ぐ。

「私たちは訳在つてサンプロフロッタ空港に向かつてゐるのですが、この土地に不馴れであり、道に迷いました。その為、私たちをサンプロフロッタ空港まで案内して頂きたい。」

と。

店主ひしき野性はそれを聞き何故か安心したような表情を見せた。それは、よく顔を見なければ分からぬよう些細な変化だ。

「はあ… そうですか。しかし、サンプロフロッタ空港までは歩いて一時間半はかかります。わたしも店のことがありますので… 良ければ、地図をお渡ししますが。」

と、

「じゃあ… 仕方無いか。皆、地図を貰つて…」

「ひゃんがんがんでも聞こかけたとき、それは遡られた。

あず「いやんだ。

「何を言つてゐるんですか。被占領民の分際で。」

それを聞き、店主らしき男性ね表情が強張る。

「貴方は自分の立場が分かつてゐるのですか。我々に協力することは、貴方達サンサルバシオン国民の義務です。

それに、歩いて時間がかかるならば、車を使えば良いじゃないですか。」

その口から出てきた言葉。

それは、占領国の軍人の言葉。

戦争が起こらなければ、一生他人に言い放つ事は無いであろう言葉。

それを彼女は、何の躊躇いもなく言い放つた。

あずにやんと店の店主らしき男性が揉めている。

あずにやんは車を出せと言つて、男性はガソリンが無いと言い張つた。

あずにやんからすれば、高圧的な態度で臨んだ分後に引けないのだ
うつ。

「いや、なんを育めておつ、ムギちゃんは少しオロオロしてこる。

店の厨房からは、ウエイトレスと料理人らしき男女が此方へ小走りで駆けてきた。

ああ

ややこじになつたのだ。

私は頭を抱えたくなつた。

ふと、店の奥 一回へ続く階段の方を見ると、一人の女の子と皿があつた。

金髪の、年の頃は必ずこやんより少し下か。

少しキツい顔をした、しかし本来は優しそうな顔だった。

彼女は一回りを少し見つめると、一回へ上がった。

そのとき、店の外で車が止まる音がした。

近所の人間が、憲兵隊に通報したのか

面倒くさいことになる、と思い身構えるが、入ってきたのは一人の女性だった。

「…え。」

私は、その女性を見て驚いた。

後にも先にも「ここまで驚く」とは無いだろう。

厳密にはこれより数カ月後、ファーバンティにて変わってしまった幼馴染みに再開し、かなり驚くことになるのだが。

とにかく私は驚いた。

「まあ…」

「さわやかさんなんて田舎者を黙れせりふる。

透ちゃんは暫くは氣付かずに口論を続けていたが、一いちらを見てビックリしていた。

「あ……さわやか先生、な……なんで。」

さわやかさんと三中さわやか。

私たちの恩師であり軽音楽部の顧問であった彼女は今、軍服に身を包み、私たちの前に立っていた。

「ちよつと嘘、人の行き付けの店で喧嘩なんて止してよね。」

そう言ってイタズラげに笑う。

軍服には鷲座の部隊章。

その笑顔は、私たちにいつも見せていた笑顔であり、軍服には到底似合わぬ笑顔だった。

私たちが予期せぬ恩師との再開を驚いていたと、店主ひじき男性はさわやかさんに助けを求める。

「あ……貴方達ですか。ちよつと一助けて下さー。」

それと同時に店のドアが再び開く。

二、三人の男が入ってきた。

「黄色の4、何か揉め事ですか。」

恰幅の良い中年の准尉だ。黄色の4とはわちやんの「ホールサイン

だろうか。

「ええ、予備士官学校の予備士官が少しあイタしてたのよ。」

それを聞き、男らはこちらを睨む。

「怒らないであげて。私の生徒なのよ。」
とさわちやん。

そして、その場はさわちやんの取り成しもあつて何とか収まった。
サンプロフュッタ空港のジャン・ルイ大尉にも、あの中年准尉が連絡をしてくれることになった。

「うちの隊は良くここで飲むのよ。サンプロフュッタ空港から迎え
が来るまで付き合になさい。」
と言われ、私たちも一緒にいることになった。

あずには少し不貞腐れている。

やはり揉めてしまつた手前屈づらいのか。

店のイスに座る。

店の中に続けて七、八人入つてくる。

その中には、十二、三歳だらうか。男の子の姿があつた。

他の隊員と同じく揃いの上着を来ている。

私はりつちゃんたちを見た。皆不思議そつな顔をしている。

そして最後の男が入るとき、あの中年准尉が突然大声で言つた。

「さあ、我らが」

このサンサルバシオンで

「アクリラ隊隊長」

私たちは彼と出合つた。

「黄色の1-3。」

そして他の隊員から喚声が上がる。

さわぢやんを見ると、じゅりを見てウイインクした後、彼を見て拍手した。

彼 黄色の1-3

これが、私たちと彼との初めての出合つた。

黄色の1-3は店に入ると私たちの方を見た。
そして

「黄色の4、その子達は。」
と、わわわわわわわんと問ひ。

その目は冷たく、鋭い。

「私が教師をしてたときの生徒よ。この店でちょっとおイタしてたら
から懲らしめたのよ。」

そう言つてわわわわわんは笑う。
しかし黄色の13に向けたその笑顔は、私たちに向けるのとはまた
違つ笑顔だった。

「サンプロフロッタ空港から、ジャン・ルイつていう大尉が迎えに
来るらしいからそれまで一緒に居させてあげてね。」

そつそつとわわわわんは私たちに向かつて小声で

「教官さん、だいぶキテたわよ。」

と囁いた。

私たちはそれを聞き、苦笑いをする。

ああ、またどやされるのか
と咄咄つたに違いない。

彼女はそれを見て悪戯げに笑う。

かつて部室で見せていた、少し子供染みた笑顔で

「さあ、始めるか。」

中年准尉の声と共に、そこに居た兵士達が歓声をあげる。
私たちは座つて居る席から、何が始まるのか只見ている。

すると中年准尉が各自の「ホールサイン」と撃墜数を読み上げていく。

どうやらHJの中隊は今日空戦を行なつたりしく、これは各自の戦果
発表の様だ。

そのとおり、いつちゃんが

「HJの部隊のホールサインって黄色の何々つて言つんだな。

と誰に言つてもなく呟いた。

「…黄色、か。」

と澪ちゃんもそれに続く。

そして澪ちゃんの表情が変わる。

「な……なあ、黄色つたら……もしかして。」

「何時にも無く無く無い様子で、顔が遅ちやんを見る。

「Iの部隊つて、あの 黄色中隊 じやないのか。」

それを聞き、顔の表情は驚きに透かる。
無論、私も。

「あ……マジかよ。

「じゅあ遅りやんせ、わざ先生が黄色中隊の隊員だつてこの。」

「じゅあ遅りやんせ、わざ先生が黄色中隊の隊員だつてこの。」

ムギヤんも驚きの表情を浮かべる。
しかし、それは無理もないこと。

正式名称は第156戦術戦闘航空団アクイラ隊

ストーンヘンジを防衛する中央コージア条約機構指揮下のSNTN警備飛行隊との戦闘や、ストーンヘンジ爆撃を敢行したISAF空軍との空戦で名声を得た精銳部隊。

予備士官学校の授業でも何回も聞いた名前。

軍事大國エルジアの象徴。

その部隊にさわちゃんが居るなんて、いかに私でも信用できない。

「でも先輩、あの部隊章を見てください。」

あざにゃんがそう言って、黄色の13の隣に席を移したさわちゃんを指差す。

「部隊章に描かれてる鷲座に五つの機体のマーク。あれはアクイラ
隊…別名黄色中隊のエンブレムですよ。」

あずにやんがそこまで言つたとき、一際大きな歓声があがり、パイ
ロットの一人が頭からビールをかけられた。
どうやら撃墜数が通算五機に達し、他のパイロットから祝杯とやつ
かみを浴びせられているらしい。

そして、中年准尉が再び読み上げる。

「そして我らが隊長黄色の13は

撃墜4、通算撃墜数は72。

」

その瞬間、他の隊員が歓声を上げた。

店内はお祭り騒ぎとじつに相応しい。

そして、つちちゃんが

「…間違ひ無い、な。」

と言つと頭は頷いた。

今、私の田の前に居るのは、紛れもないエルジアの英雄的存在のエース。

彼が率いる最強の中隊。

そして、教師から戦闘機パイロットへと転身を果たした我が恩師だつた。

何だか、さわちゃんが遠くに行つてしまつたみたいだ。

私たちが只黙つてさわちゃんを見つめていると、突然田の前に飲み物が置かれた。

見ると、先ほどの金髪の女の子だった。

「紅茶でいい?」

「…ぐ。」

彼女の質問に、私は間抜けな返事をする。

「お酒、飲めないでしょ。」

そう言って彼女は、私たちの前に人数分のティーカップを置くと、さつさと引っ越し込んでしまった。

「…ダージリンね。」

ムギちゃんがそう呟く。

「水色が明るくて、紅茶の中でも特に香りを重視されるのよ。」

彼女はそう言って一口飲んだ。私もそれに続く。ダージリンの香りが口の中に広がる。

頭の中を駆け巡る記憶。

皆と音楽室で紅茶を飲んだ。

ケーキも食べた。

練習をした。

文化祭ではライブもした。

軽音部の思い出。

戦争が無ければ続く筈の毎日。
変わることの無い平凡で、しかし輝いていた私たちの毎日は、ストーリンヘンジによって打ち砕かれた空のように儂く散つていった。

私が紅茶を飲みながら、感傷に浸つていると店のドアが勢い良く開く。

誰かは知らないが、ドアを少しばらつてくれよ

店主の顔にはそのような表情が浮かぶ。

しかし、店に入ってきた男の顔を見た私たちは、酷使されるドアを気にかける余裕など無かった。

店に入ってきたのは、阿修羅の如き表情をしたジャン・ルイ大尉だったからだ。

「貴様ら、何をしておるか！」

ジャン・ルイ大尉が叫んだ瞬間、店内は水を打つたように静かになった。

それはまるで時間が止まつたかのようだ。

ジャン・ルイ大尉は私たちのところに近付いてくる。

さわちやんが、大尉はだいぶキテたと言つていたが、これはキテるどこの騒ぎではない。

恐らく私たちの顔は今、真っ青に成つてゐることだろう。

しかし、ジャン・ルイ大尉の歩みは私たちの少し前で止まる。大尉の進路を、さわちやんが塞ぐようにして立つている。

「お迎え」苦勞様です。アクイラ隊のサワコ・ヤマナカです。」

「…うちの予備士官がご迷惑をおかけしました。第2教導飛行団のジャン・ルイ・フロー・ベルです。」

そう言つてジャン・ルイ大尉は頭を下げる。

さわちやんは横田で顔面蒼白の私たちを見る。

そして、大尉に対して

「あの子達を怒らないであげてね。私たちが引き止めてたのよ。」
と言つて、「ね、」とさわちやんは黄色の13を見る。

大尉は黄色の13を見た。

当の黄色の13せいかりを見ると無く、ペールを口に運んでいる。

「いや、怒るつもりはありませんよ。」

と言つた。

フフ、と口元は笑つてゐるが、目元は笑つていなかつた。

そして

「お久しうぶりです、ボス。」

と言つ。

黄色の13は只腕を組み、下を向いてゐる。

大尉の顔を見てはいなが、

「…久しぶりだな、ジャン・ルイ生徒。アグレッサー部隊以来だな
…元気にしていたか。」

と声を発した。

それを聞き、ジャン・ルイ大尉は「ええ。」と一言返した。

只それだけ

それだけの会話だつた。

それだけを言い終えると、ジャン・ルイ大尉は私たちの方を向いて

「帰るぞ。
と言つた。

それを聞き、私たちは慌てて立ち上がる。

そのとき、澪ちゃんが思い出したよつこ
「あ……お金払わないと」

それを言えるだけ、彼女は占領国の軍人に成りきれて居なかつた。

柄の悪い軍人ならば、自らの立場を盾に代金を踏み倒すといつ事も
いとわないと聞いたことがあつた。

残念なことに、当時エルジア軍のサンサルバシオン駐留軍のなかに
もそういつた輩が少なからず居たことが、サンサルバシオン国民の
反エルジア感情を高ぶらせていく要因の一つだつた。
「ああ、いいわよ。私が出しつくわ。」

突然のさわぢやんの申し出。

生真面目な凌ちゃんは当然反対する。

その横でいつもちゃんと少し残念そうな顔をしたのは私の見間違いだ
わ。

「良いわよ、たまには先生らしくさせなさい。」

そつとて私たちを店の外に押し出す。

店の外には、ジャン・ルイ大尉が車にもたれ掛かるよつとして待つ
ていた。

その車のすぐ後ろにも、同じ型の車が停まっている。

運転席側のドアが開くと、教官のジーン中尉が降りてきた。

「ヒラサワ少尉、ナカノ曹長は大尉の車に。残りは俺の車だ。
そうジーン中尉に促され、私たちは一組に別れて車に乗る。

ああ、空港につくまでの魔のドライブに私がブルーになつていても
あつと…

と、空港に着くまでの魔のドライブに私がブルーになつていて、
あづにyanが私の肩を叩く。

「さわ子先生が教官と何か話しますよ。」

そう言われて車の窓から見てみると、確かにさわちやんがジャン・ルイ大尉とジーン中尉に何か言っていた。

ジーン中尉は何やら困り果てた顔をしており、ジャン・ルイ大尉は始終顔をしかめていた。

その後も何かやり取りをし、さわちやんは私たちに手を振りながら店に戻つていった。

私たちもさわちやんに手を振り返す。

そのとき、車の運転席側のドアが勢い良く開き、ジャン・ルイ大尉が不機嫌そうに乗り込んだ。

「あ…あの、大尉。」

ジャン・ルイ大尉はまるで私の声など聞こえぬかのように珍珍^{HENZHEN}をかけ、車を走らす。

後方のジーン中尉の車もそれに続く。

車はサンサルバシオン市街地を駆ける。

昼間の賑やかさが嘘のように静まり返った市街地は、人一人出歩いていない。

そんな市街地に合わせるかのように車内も静まり返つていた。

大尉は只今車を運転し、私とあざにゃんは只前を見つめる。

そんな状況で、車は一体何分走つただろうか。

最も、私には何時間も走ったように感じたが

ジャン・ルイ大尉が、この静けさを破つた。

「…明日1230に、アクイラ隊より迎えが来る。」

あずにやんと私は、ジャン・ルイ大尉の言葉に耳を傾ける。

「お前ら五人を、基地に招待したいとの申し出があった。」

私は、一瞬理解できなかつた。。

しかし、内容を理解するにつれて、疑問が浮かんできた。

最も、私がその疑問を口にすることはなく、私の隣に座るあずにやんがそれを代弁してくれたのだが。

「あの…大尉、なぜ私達がアクイラ隊に招待など…」

「俺に聞くな。あの男の考へることはさっぱりわからん。」

そう言い捨てるジャン・ルイ大尉はかなり不機嫌そうだ。車のスピードは段々上がつていき、運転も荒くなる。後方のジーン中尉の車が段々引き離されていく。

「お前らが基地に行くも行かんも勝手だ。」

バックミラーに映るジャン・ルイ大尉の目は、チラチラと私たちを見る。

「…だが、一つ言つておく。」

車の前方に武装憲兵隊の検問所が見えた。
憲兵が灯火信号で車に止まれの合図を掲げる。

「…あの男に、あまり感化され過ぎるなよ。」

え

と、いつ言葉が私の口から思わず飛び出た。

それに合わせて車が検問所で止まる。

ジャン・ルイ大尉が武装憲兵と何やら話している中、私とあずにやんは顔を見合せた。

「…どうこう意味でしょ、先輩。」

私に聞かれてもわかる筈がない。

私は首を横に振る。

私達が検問所の前に停まつていると、ジーン中尉の車が漸く追い付いてきた。

車よりジーン中尉が降りてきて、ジャン・ルイ大尉と共に武装憲兵と話をしている。

「うやうやしくスピードの出しすぎだしね、武装憲兵が折れたようで車は検問所を通過した。

「あの、大尉。 あなたの言葉はどうこいつ...」

あざにゃんの言葉を遮るようにジャン・ルイ大尉は「何も聞くな。」と言つた。

「そのままの意味だ。」

そして

「空港が見えたぞ。」

と。

車の前方に、暗闇に光るサンプロフォッシタ空港の管制塔が見える。

サンカルバシオンに鎮座する空軍の本拠地であり、私達若鷲の巣。車の時計のデジタル画面はもうすぐ日付が変わる時刻を表示している。

車はそのまま空港のゲートに向かう。

寒空の下ゲートに立つ歩哨に大尉は何やら伝えると、歩哨がゲートを開けた。

月明かりに照らされながら、車はゲートを潜り抜ける。

後部座席に乗っている私たちに歩哨が敬礼する。

それを受礼した私は、寒空の下寝ずの番をする歩哨の身体を案じてやるでもなく、只

今日は大変だつたなあ

何で呑気なことを思つていた。

翌日、私たちは黄色中隊の中年准尉、さわちゃんの一人が運転するジープに揺られていた。

「唯ちゅやん、りつちゅやん。なんで貴女たちそんなバテてんのよ。」

私とりつちゃんを乗せてるさわちゃんは、少し心配気味だ。
最も、私とりつちゃんだけじゃなく、残りの三人もバテバテなのだ
が。

「だつて…なあ、唯。」

りつちゃんは精気の抜けた目で私を見る。
それに対し私は力無く頷いた。

話は簡単、私たちは昨日の件に対する懲罰を喰らったのだ。

他の皆が起きる前から訓練がスタートし、朝食は抜きと言つ特別口
ースだつた。

担当したジーン中尉も寝不足らしく、訓練中は何度も間抜けな顔で
欠伸をしていた。

そんなに眠いならしなきゃ良いのに

と思つたのは私だけではない筈だが、それを口にする猛者は居なか
つた。

只りつちゃんが、ジーン中尉が欠伸をする度にクスクスと笑い、ど
やされてはいたが…

黄色中隊より迎えが来る前に昼食とシャワーは済ませたものの、疲

労感は半端無い。

疲れた私たちにすれば昨晩のジャン・ルイ大尉の荒っぽい運転に対して、さわちやんの落ち着いたら運転は心地よい子守唄のようなものに感じた。

「まあ何があつたかは知らないけど、お疲れさま。」

さわちやんはそう言って笑う。

彼女は勘が鋭い。

軽音部でもそれは発揮されていた。何があつたか知らない、なんて言つてるけど、大方察しはついてるんだろう。

そういうえば、私に変装した憂を見抜いたとかいつてたなあ…

私が高校二年生の時のことだ。文化祭の直前に私は熱を出して学校を休むことになった。

そんなとき、一つ下の妹の憂は私に変装しライブの練習に参加したらしい。

軽音部のメンバーさえ見抜けなかつた憂の完璧な変装を、さわちやんは見抜いたというのだ。しかも、胸の大きさで。

全く、やわらかやうじこみね。

眠氣で上手く回らない頭でそんなことを考えていたとき

「 もう、着いたわよ。」

やつまつて車が止められる。

町外れにある建設途中の高速道路を利用した野戦滑走路。

そこに大型のキャンピングトレーラー や、通信車両が居並ぶ。

エルジアの守護神にしては少々お粗末な拠点が、彼らの住処だった。

眠氣でフリフリとしながらも私とつぢちゃんは車から降りる。

おーい、と呼ばれ、その方向を見ると邊りやんらが中年准尉に連れられてこいつに来ていた。

びつやう邊りやんも眠氣は全くとれていないじへ、少しフリフリとしている様だ。

そして、私達は一人に一人のキャンピングトレーラーまで案内される。

「ルイが彼の住居よ。」

彼とは黄色の13のことか。

さわせやんがキャンピングトレーラーのドアに手をかけ様としたら
れ、ひとつ茹でトトロが出てきた。

「あ…黄色の4。」

「あり、彼は居るかしら。」

さわせやんの問いに、そのトトロは少し困惑した様子を見せる。

「ええ、只…来客が居ますが。」

歯切れの悪い返事だ。

それを聞いたりつちゃんが

「あんな返事の仕方、ジャン・ルイ大尉が聞いたらぶつ飛ばされて
るわ。」

笑いを殺しながら私にそつ囁く。

「来客…」

その返事を聞いた中年准尉が少し考える素振りを見せる。ジヤン・ルイ大尉の様に、歯切れの悪い返事をした相手を殴り飛ばしはしなかった。

「そのお密はどんな人なの。」

さわちやんもだ。

いつもと違う多少難しい顔をしているものの、その変化は良く見ないと分からぬ。

中年准尉や若い下士官がその変化を読み取ったかどうかはわからぬが、少なくとも私たち軽音部のメンバーはそれに気付いた筈だ。

「は…何でも昔の知り合いとか。」

態々基地にまで訪ねてくるなんて、余程親しい友人だろうか。でも、私は気になっていた。

何で、来客程度でここまで難しい顔をするんだろう

「名前は何と言つていた。」

中年准尉が聞く。

「名前は…確かにアシュレイ…アシュレイ・ベルニッツとか。」

アシュレイ・ベルニッツ

その名を聞いた瞬間、さわちやんの表示が強張る。

「アシュレイ・ベルニッツ…本当にそう言つたの。」

はい、と若い下士官は返事をする。

それを聞くやさわちやんはキャンピングトレーラーの中に駆け込んだ。

中年准尉もその後に続く。

若い下士官はそれを見て暫く唖然としていたが、ふと、我に戻ったのか。

慌てて一人を追い、キャンピングトレーラーの中に入つていった。

自然、私たちほどの場に取り残された形になつた。

「… ビルかね。」

澪ちゃんは私を見る。

困ったときはいつも私かりつちゃんだ。

優等生タイプの澪ちゃんは、いついた時は誰かに判断を委ねることが多い。

「なあ。黄色のーーに来てる密つてさ、どんな人が見たくないか。」

りつちゃんは興味深々といった様子だ。

「でも… わざわざ先生の様子、気になるわね。」

とムギカリちゃん。

私も引つかつてた。

さわぢやんのあの慌て様は普通じや無かつた。

「なあ、なんか気になるよな」と言つやつちやんは、キャンピングトレーラーのドアに耳を当てる。

「え… 何してるんだよ、律。」

「馬鹿、聞こえないだろ。澪。」

りつちやんは口に人差し指を当てて「ジー」というポーズをする。それを見たムギちゃんも、りつちやんの様にドアに耳を当てる。

「私、人の会話を盗み聞きするのが夢だったの。」

「おこ、誰はいるんだ。」

りつちやんは私を見る。

私も、ムギちゃんやりつちやんの様にキャンピングトレーラーのドアに近づいた。

私のその姿を見たからかどうかは分からぬが、澪ちゃんとあずにゃんもドアに近付き、向こうで行われる会話を耳で捉える体勢になつた。

「うふふふ、やっぱり澪ちゃんも気になるんでちゅね。」

「う…うるせー、馬鹿律。」

いつも部室で行われていたやり取り。しかし、それを見ても誰も笑わない。

私の手を介して、アルミの独特的の冷たさが伝わっていく。

それと同時に、ドアの向こうからうつむかって会話が聞こえてきた。

ア…レイ…そんな…に…しない。ベルカの…には…い
クリン…ン、ミヒヤホールも参加したんだ。ケラー…ミーの同期
だわう。…直せ。

お前たち灰色の…ちは道を誤つた。ベルカは鬼神に負けたんだ、
あの戦争で。

鬼神に負けて…、俺達はオーシアに敗れたんだ。ベルカは必
ず甦らせる。

⋮

所々聞こえない部分もあつたが、段々と聞き取れるようになつてき
た。ドアの向こうの声が、段々とボリュームを上げている。

「…一体、何の話をしてんだ。」

りつちやんの問いに、誰も答えない。

只、首を横に振るばかり。

あずにやんに至っては

「そんなこと分かりませんよ。」
と言葉を返す。

「でも……さつきから出でるベルカつて、あのベルカ公国のことよね。

」

ムギちゃんが誰に言ひでもなくそう呟く。

ベルカ公国

嘗ての雄武国家

強大な空軍を有し、

隣国ウスティオ共和国に攻め行つた国

時代の変化を見極めきれなかつた、古き時代の国

その末路は皆知つてゐる。

自国で核を使用する暴挙に出、自壊した。

今は領土の大半を失い、一小国に転落している悲劇の国。

「…そのベルカが、黄色の13と何か関係があるの。」

その私の問いに誰が答えるというのか。

しかし、クエスチョンマークが頭を駆け巡る私には、その疑問を口に出さずに置くことは出来なかつた。

そのとき、不意にドアの向こう側で足音がしたかと思つて、ドアが勢い良く開かれた。

ドアに体を任せていた私たちは、それが開かれたことにより一気に倒れこむ。

「おやおや、エルジアはこんな少女達も軍に入隊させているのか。」

その声に、私は上を向く。

視線の先には、一人の男が立っていた。

短髪でつり上がった目をした壮年の男性。

彼は私たちを見下ろし、小馬鹿にしたように笑った。

この声……この人が、アシュレイ・ベルニッツか。

アシュレイ・ベルニッツは小馬鹿にしたような下卑た笑みを止め、黄色の13の方へ顔を向けた。その表情は先程の下卑た笑みを浮かべていた時とは違い、そのつり上がった目を更につり上げていた。

「クリンスマン、見てみろ……この少女達を。」

クリンスマン

アシュレイ・ベルニッツの口から出た聞き慣れない名前。

それは、黄色の13に向けられた。

「この少女達は、戦争が無ければ青春を謳歌することが出来た……
そうだろう。」

私達が予備士官学校に進んだときに捨てたもの。

あの、さういきらと光輝いていた毎日の中に確かに存在していたそれ

「エルジアはもう終わりだぞ。俺と来い、クリンスマン。
ベル力を再興させれば、お前は鬼神を忘れることが出来るんだ。」

捲し立てるよひに喋るアシュレイ・ベルニッズ。

その言葉に、黄色の13は笑う。

心底可笑しいと嘆ひよひに、只笑う。

それを見たアシュレイ・ベルニッズは　いや、彼だけではない。

さわぢやんも、中年准尉も、あの若い下士官も。

私たちも、その光景を只見ているしかなかつた。

「何が可笑しい…クリンスマン。」

「…アシュレイ。確かに俺はあの日から、鬼神の幻想を追いかけて
きた。」

静かに、しかし威厳ある声。

これが、黄色の13

これが、黄色中隊の隊長

「だが、俺は見た。鬼神の面影を持つパイロットを。コモナ島の空で、奴の影を見たんだ。

「馬鹿を言つたな。

それは、あの鬼神じゃ無い。」

黄色の13の口から出る 鬼神 のフレーズ。
アシュレイ・ベルニッヒはそれを必死に否定する。

そのフレーズに何の意味があるのか。
私たちには分からない。

だが、二人には何かしらの因縁がある。
それだけは感じられた。

「クリンスマン、考えてみる。少女を戦場に駆り立てる国家に、守るべきものはあるのか……」この国は、お前が命を賭けて守るに相応

しい国なのか。」「

アシュレイ・ベルニッヒの問いかに、黄色の1-3はほくそ笑む。そして

「……違うや。」

と。

「ヘルジアを守るために戦うんじゃない。俺は一人のパイロットとして、空で出会った好敵手と戦つんだ。」

アシュレイ・ベルニッヒにそう言い放つ黄色の1-3。
その目には、強い決意が秘められていた。

「…それが、お前の闘う理由か、クリンスマン。」

それを聞いたアシュレイ・ベルニッヒは、神妙な面持ちで呟く。

黄色の1-3は　ああ　と言つた。

「そうか。」

そつ言い捨てるとアシュレイ・ベルニッツは黄色の13に背を向け
「なら、エルジアと一緒に死ぬが良い。もう一度と会うのも無い
だらう。」

と言ひながら後ろ手に手を振る。

そして私たちを見て

「生き延びるよ、無駄に死ぬことは、何の意味も無い。」

ヒ。

いきなりの言葉に、私たちは驚いた。

先程までと違い優しい語氣に表情。此が同じ人とは思えない程の豹
変ぶりだった。

「え、あ…はい。」

迷々しく返事をするりつちゃんを見てアシュレイ・ベルニッツは笑
い、じゃあと言ひ出でていこうとする。

その時だった。

「おい、アシュレイ。」

黄色の1-3がアシュレイ・ベルーツを呼ぶ。

そして

「じゃあな、戦友……死ぬなよ。」

と一言。

たつた一言だった。

それを聞いたアシュレイ・ベルーツはフツと笑う。

そして

「ああ。」

と言い、キャンピングトレーラーを後にした。

えーすのか」――

「そつか……そんなこと也有つたな。」

りつちやんはそう言いながら立ち上がる。

その瞳は、黒煙の上がる市街地を見つめている。

あの黒煙の中に、私たちの母校もある。

女子高には凡そ似つかわしくない高射砲が屋上に設置され、校門附近に速射砲が置かれた我が母校。

きっと……学校も爆撃で無くなってしまったんだね。

「あの人……今はどうしてるんだろうな。」

「……澪先輩、今は他人の心配なんとしている時じや無いですよ。」

「……」

あづにやんにそつ言われて澪ちゃんは黙ってしまった。

生きているか死んでいるかも分からぬ。

もともと、彼は幽霊の様な存在だったのかも知れない。

だが、彼は私たちの前に確かに居た。

あの強い決意を持つて、今も何処かで戦つて居るのだろうか。
祖国ベルカのために

それが彼の戦う理由だから。

「丁度良い時間かな。行こうぜ。」

その言葉に皆が立ち上がる。

それに続き私も慌てて立ち上がる。

そのとき、私の目に入った光景。

真っ赤に染まる首都の空

夕焼け空は、まるで血のように紅い。
大空に散つていった幾多のパイロット。

いつもの澄んだ蒼い空は、その血を吸つた様だった。

「貴女達……ここに居たんだ。」

不意に後方から声がする。
皆が振り向くと、そこには彼女が居た。

私の大事な幼馴染み。

私の親友。

「和…ちゃん。」

私の声など聞こえぬかの様に微動だにしない。

その冷たい眼差しを私たちに向かへ、

「貴女達…トウインクル諸島に行くみたいね。」

と言いながら近づいてくる。

何かを覚悟したような強い目で、私たちは圧倒される。

澪ちゃんなんて、りつちゃんの後ろに隠れる様にして立っている。

「和、知つてたのか。」

りつちゃんは一步前に出て立つ。

「ええ、あのジーンとかいう中尉に聞いたわ。びっくりしたわよ。」

口元は笑っている。

しかし、眼鏡の奥の目は笑っていない。

その顔は、冷徹な仮面を付けているかの様だった。

そして

「駄目よ…絶対に行かせないわ。」

そう言いながら和ちゃんが私たちに向けたもの。

それは、余りにも見慣れたものだ。しかし、軍隊に入らなければ一生縁の無い代物。

人に向けることも、向けられる事も無いだろう。

それを和ちゃんは私たちに向けた。

夕陽の紅い光を浴びて、黒く光るピストルを

「貴女達を行かせはしないわ。行つても死ぬだけよ。」

ピストルを持つ手が微かに震えている。

「姫子もエリも信代も…皆死んだ。」和ちゃんの頬を大粒の涙が伝う。

「貴女達まで…死なせる訳にはいかないのよー。」
張り裂けんばかりの声。

それが、不気味なほどに静かな辺りに木霊する。

「私は貴女達を死なせはしない…例え罵られようど、後ろ指指されても良いわ。これは…私の戦いなのよ。」

そう言つたところで、和ちゃんは下を向く。

あの冷徹な仮面は剥がれ落ちた。

その下にあつたのは、私たちを死なせんとする優しさだった。

その気持ちは嬉しい。

映画なら、ここで私は涙を流して彼女と抱き合つのだひだ。

優しい友との友情を感じながら。

しかし、私は涙など流さない。

今の私にとって、彼女の優しさは

邪魔だから。

「…和ちゃん。」

私たちは彼女に近づく。

皆は驚き、止めようとするが私はお構い無しだ。

「…唯、動かないで。撃つわよ。」

声を震わせながら和ちゃんは私に警告する。

震える手でピストルを構えているため、銃口は上下に揺れている。あんなのじや、当たることも出来やしないだろ。

「和ちゃん、そこを退いて。私たち、行かなきゃいけないの。」

和ちゃんの前に立ち、そう告げる。

そう、私たちは行かなきゃいけない。

あの日の約束を

私たちの誓いを果たすため

リボンを落とすといつ田的のために

行かなきゃいけないんだ。

「唯…何でよ。何で戦うの。もう終わったのよ、何もかも。」
そう言いながら和ちゃんは少しずつ後退り、私との距離をとる。ペ
ストルは相変わらず私に向けながら。

「まだ終わってないよ。」

そつ言つて一歩進もうとしたとき、乾いた音が辺りに響く。

私の足元のコンクリートが小さく砕かる。

「動かないでつて言つたでしょ。」

銃声が聞こえたのか、先程より姿の見えなかつたあの歩哨が血相を
変えて此方に走ってきた。

エルジア共和国の予備士官が、同じくエルジア共和国の士官にピス
トルを向けられている

この構図に、その歩哨は呆然としている。

「唯、さわ子先生の…黄色の4の敵討ちのつもりなら、止めなさい。」

先程の声の震え、手の震えは止まつてゐる。銃を撃つたお陰で吹つ
切れたのか。

「…わわちゃんを殺した相手を、和ちゃんは許すつもりなの。」

私の問いに、和ちゃんは考える事なく即答した。

ええ

と。

「変わったね、和ちゃんは……私には出来ないよ。」

私の言葉に、和ちゃんは眉一つ動かさない。

いつの間にか彼女の表情は、高校時代に見せていた、生徒会長の表情に戻つていった。

高校時代に見せていた顔で、さわぢやんを死なせた仇を許すなんて……

和ちゃんは変わったよ……

そんな言葉を頭の中で呟きながら、私は足を進める。

ああ

「や！」を退いて、和ちゃん。」

私は今

一步前に。

「駄目よ、退かない。」

どんな顔をしてこらのだらつか

また一步前に。

「わー一回転つまー退こて。」

一体どんな顔で

足を進める。

「う…来ないで、撃つわよ。」

彼女と向き合つてこらんだらつ

「撃てば。」

その言葉と同時に、またあの乾いた音が空気を震わす。

私の顔の横を鉛の弾が掠めるのと、つりひやんらが驚いて叫び声を上げるのはほぼ同時だった。

「…当たらなかつたねえ、残念。」

私は意地悪げな微笑みを浮かべ、和ちゃんの前に立ち、彼女が握るピストルをその手から引き離した。

それと同時に、和ちゃんはその場に崩れ落ちるよつて座り込む。

私はそれを見届けると、再び歩き始める。

後ろから、「ちよ、ちよつとい。」とあざにじさんの声がすると共に、皆の走る音がした。

私はそれに振り返ること無く、後ろ手に手を振る。
もつ余うことは無いのである、幼馴染みにむかって

嘗て私が見た、戦友の別れの光景の様に、さよならを告げる。

「……唯。」

和ちゃんの声。

私は足を止め、振り返る。

「何、和ちゃん。」

私を見つめる和ちゃんの瞳。

それに私はどう映っているのだろう。

「唯、私は…変わっていないわ。変わったのは、貴女よ。」

嗚咽の混じりの絞り出すような声を、大粒の涙を流しながら叫ぶ。

だが、私はその言葉に何の反応もしなかった。

りつちやん達が私に追い付くと、私は和ちゃんに背を向ける。

和ちゃんは、さよならを言つてくれないんだね

なんて呟く。

聞こえることも無いであろう声で。

私が見たあの時の別れの光景と、私と幼馴染みの別れ姿を頭の中で比べつつ私は教導団司令部に向かう。

バイバイ、私の大切な親友

聞こえる筈の無い別れの言葉を、心中で呟きながら

司令部に向う道中、皆は私に気を使つたのか一言も話さなかつた。

その皆の気遣いは、私にとっては要らぬお節介だつた。

最も、これから私たちは戦局挽回の大博打を打ちに行く。

例え和ちゃんの件がなくとも、司令部への道中は誰も喋らなかつたのだろうが……

私達が司令部に着いたとき、既に私たち以外の予備士官らはイスに座つていた。

時刻は集合時間の15分前。

通信機の前に座る情報士官は居るもの、ジャン・ルイ大尉以下教官達はまだ来ていなかった。

上手い具合に5つ席が空いており、そこに座る。周りを見ると、皆一様に表情が暗い。

頃垂れている人

一心不乱にメモ帳にペンを走らせている人

強張った表情で、只前を見つめる人

ここに居る20余名の予備士官は、各々が自分の世界に入っていた。
誰にも侵されることの無い聖域。

例えそれが鬼の教官らであっても、軍関係者からも恐怖の対象である憲兵隊であつても

誰にも邪魔されない世界に。

私も、自分の世界に入る。

目を瞑り、あの日の事を思い出す。黄色の13の過去を知った日の

！」……そして、私がリボンの戦闘機を「」の田に映した田の「」を

：

「おい、予備士官。」

キャンピングトレーラーから出ていったアシュレイ・ベルーツを茫然と見つめていた私たちは、突然後ろから黄色の「3」に呼ばれて「ひや、ひやい！」なんて間抜けな返事をしてしまった。

後ろを振り向くと、ぱつの悪そつな顔をしてくるやわちやんと中年准尉、若い下士官、そして鋭い目 スカイキッドで出来つたときよりもっと鋭い目の黄色の「3」のだった。

「な……なんで」「それこままでしうつか。」

驚きの余りおかしな返事をするつちやんを無視して黄色の「3」は喋る。

「今日は突然の招待ですまなかつた。」
と。

「本當なら、我々お得意の編隊飛行を見せて戦技の勉強でもしてもうおつと思ったが……それは止めた。」

そう言つなり黄色の13は徐に立ち上がり、私たちに近づく。

「お前達に聞いて貰いたい。俺の過去を。」

その言葉を聞いたさわちやんは驚く。

「うふ、ちゅうひ。黄色のーー。そればどーー。」

「いいんだ、サワコ。」

わがやさんの言葉を遮るよつて喋る黄色の13。

「これは、今から10年前…俺がベルカの空を飛んでいた時の話だ。

L

そして、黄色の1-3の独白が始ま。寝室のベッドで、我が子におとぎ話をしてくれる父親のよつたな優しい口調で。

あの日 ベル力絶対防衛戦略空域B7Rで鬼神と出会つた日の事を

を

：

1995年5月28日

ベル力絶対防衛戦略空域B7R

通称 円卓

雄武國家ベル力の国力の象徴であり、国家防衛の最重要エリア。
俺はあの日、その空を飛んでいた。

「基地からの援軍はまだか。このまま一気に畳み掛けたい」

隊長の叫びが俺の機体に響いく。

あの日、オーシア・ウステイオ連合軍は円卓に大規模な航空攻撃を敢行。

それに対してB7Rの常駐部隊は反攻し、連合軍に多大なる損害を与えた。

俺も常駐部隊の一員で、通算撃墜数も12機を数えた、エースと呼ばれるパイロットの一人だつた。

だが、当時のベルカには俺の撃墜数を軽く上回るエースは腐るほどいた。

凶鳥フツケバインと呼ばれたベルカ空軍のトップエース、ウォルフガング・ブフナー

灰色のスズメバチの異名を持つ第3航空師団のエリート、バステイアン・シュナイダー

軍航空学校の教官で、現役の頃は銀色のイヌワシと謳われた、ディトリッヒ・ケラーマン

……

大勢のエースが居たが、その中で今も生きてる奴は何人居るだろうか？

……話が逸れたな。続けるぞ。

敵味方が入り乱れる空中戦

そこいらかしこで爆発音と、機銃の軽快な発砲音が響き渡っていた。

」のまま押し返せる

誰もがそう思つていただろう。現に俺もそう思つていた。

あの日、あの空に居たベルカのパイロットでそう思わない奴はいなかつた筈だ。

だがそのとき、18000フィートから急降下で一機の機体が突っ込んできた。

あの時のことは良く覚えている。

なんせ、隣を飛んでいた僚機が機銃弾を浴びて一瞬で落とされたんだ。

突然のことには俺は目を疑つ。

その瞬間、俺の横を飛び去る一機のイーグル。

一機は右翼を紅くペイントした機体

彼奴は片羽といって、当時名づけの傭兵だった。

そして その先を飛ぶ一番機

「タウブルグの剣を抜いた奴が紛れ込んだ。警戒しろ。」

隊長の指示も俺の耳には入つてこなかった。

俺は震えていた。

恐怖じゃない……奴を落とせば、名声を得られる。

そう考えただけで、俺の体は震えたんだ。燃え盛る闘争心を、抑えられずに。

タウブルグの剣

ベルカ南方のタウブルグ丘陵に建設された、超高層レーザー兵器工
クスキヤリバーの別名だ。

1995年5月23日にウスティオ空軍に破壊されるまで、それは
ベルカ最強の兵器だった。

だが、それは破壊された。

今、俺の田の前を飛ぶ

あの一機編隊の一一番機によつて

「奴らを落として名声を得る。
自然と口が動いていた。

直ぐに機体を動かし、奴らを追尾する。

他にもオーシアの空軍機やウスティオの傭兵部隊が周囲を飛んでい

たが、俺の目にはあの一機しか入っていなかつた。

だが、追い付けなかつた。

巧みに空を飛ぶ先頭の一一番機。

型にはまらない機動をする一番機に平然と続く一番機。

奴らを追尾して一体何分飛んだか俺は分からぬ。だが、奴らが円卓に来たことで、連合軍が息を吹き返したことはよくわかつた。

円卓の磁場の影響で混線している無線通信。

敵と無線で会話できる程円卓は強い磁場が飛び交つてゐる。

俺の「ツクピット」には、反撃を告げるオーシアのパイロットと、あの一一番機を鬼神と呼ぶ味方パイロットの悲鳴が響いた。

「援軍はまだか……本国は何をしている!」

隊長の絶叫が響いたかと思う瞬間、隊長機がレーダーより消えた。

「隊長機が消えた…指揮系統を確認！」

無線の向こうで誰かがそう叫ぶ。

だが、一度乱れた体勢はそう簡単には立て直せない。

もう駄目か……いや、奴だけは

全てを焼き飛くす様な鬼神の攻撃。

それに晒される味方を尻目に、俺は只目の前を飛び鬼神を追いかけ
ていた。

翼をもがれ火を吹いて落下する味方機

友軍機は最早数えるほどしかレーダーに映っていなかつた。

だが、そのとき円卓北方より侵入する機体がレーダーに映つた。

味方パイロットは援軍の到着と歓声を上げる。

だが、どうも様子がおかしかった。

その部隊は、一機の味方機を追跡するようにして侵入してきた。

その理由はすぐにわかった。

敵味方の通信を無差別に拾う無線に、はっきりとそれは聞こえた。

「シュヴァルツェリーダーより各機へ、逃走を図った機体がここへ逃げ込んだ。」

冷徹な声で、はっきりと

「…最悪の援軍だ。」誰とも知れない呟きが俺のコックピットに響いた。

シュヴァルツェ隊

正式名称 ベルカ空軍第13夜間戦闘航空団第6戦闘飛行隊シュヴァルツェ隊

アルツェ

ベルカ空軍の傭兵部隊であり、畏怖の対象であるエスケープキラー。

隊長はドミニク・ズボフと言つチンピラの様な風貌の男だった。
俺も一度だけ基地で見たことがある。

路地裏のチンピラのボスのような顔つきで、飄々とした……だが、
その目は常に獲物を狙うハゲ鷹の様な鋭さを持つている。

そんな印象をうけた。

そのドミニク・ズボフに率いられたシュヴァルツェ隊が、何故ここ
に来ているのか。
その理由は直ぐにわかつた。

「相手はあのフッケバインだ。油断するなよ。」

フッケバイン

本名 ウォルフガング・ブフナー

当時のベルカ空軍において凶鳥フッケバインの名を持ち、名声を得
ていたトップエース。

その彼を追い、シユヴァルツェ隊は円卓に侵入してきた。

俺はその時思考が一瞬停止した。

俺が子供の頃より新聞やラジオでよく見聞きしたその名前。

軍のパレードでは軍楽隊の盛大なファンファーレの鳴り響く中から登場するあの男

ウォルフガング・ブフナー大佐に憧れて、俺はこの大空に身を置いていた。

その憧れの対象が、今やエスケープキラーに追われる脱走兵に成り下がつたんだからな

だが、その一瞬が
それがいけなかつた。

その限りなく短い時間は、俺が鬼神を口ストするには十分すぎる時
間だった。

「……！」

眼前にあつた一機のイーグルは、俺の視界から完全に消え去った。

俺は眼球を頻りに動かし、奴等を捜す。

蒼く広い円卓の空。

あの日は空が狭いと感じていたが、何てことは無かった。

いつもの空 だつた。

只俺達が……ベルカ空軍機が落とされている以外は。

「くそ、厄介な奴等が敵に居る。作戦変更、逃走機は後にする。」

コックピットに響くシユヴァルツェリーダー デミニク・ズボフの声を聞き、俺はレーダーの反応を見る。

そこに映るのは、シユヴァルツェ隊に接近する一機の機影。

それは紛れもなく、あの片羽と鬼神の姿だった。

俺はほくそ笑むと機体を彼らの向う北へ向ける。

シユヴァルツェ隊に落とされる前に、俺が鬼神を殺る為に。

だがその時、円卓の磁場はドミニク・ズボフの声を見つけた狡猾なハゲ鷹の声を俺に届けた。 新たな獲物

「出たな、化け物傭兵コンビ。」ヒ。

その声を聞き、俺は焦つた。

エスケープキラー、ハゲ鷹だと蔑まれるあのシユヴァルツェ隊だが、奴等の腕は確かだった。

特にドミニク・ズボフは、ベルカ空軍パイロットの中でも十指に入るエースだった。

そのエース部隊が、あの鬼神を狙っている。

ベルカ空軍のエースを次々と叩き落とし、畏怖の対象となっているあの鬼神……

既に総撃墜数はベルカ空軍のトップエースであるブフナー大佐を上回り、名声を欲しいままにしている。

そんな奴を落とせば、俺は鬼神を落とし凶鳥フッケバインを超えたパイロットとして名声を得ることが出来る……

そう考える一方、俺のパイロットとしての勘が警告していた。

鬼神に近づくな。シユヴァルツェに任せておけ

と。

俺は、あのエスケープキラー達なら鬼神を落とせるんじゃないかと心中で思っていた。あの鬼神は、これ迄に何人ものベルカ空軍のエースを落としてきた化け物だ。

だが、奴はベルカ空軍の型にはまつた戦いをするエースを落としたということであり、それから外れたエースと戦うのは初めてだろう。

事実、あのシユヴァルツェ隊にはベルカ空軍の正規の兵士は一人も居ない。

奴等はユーフトバニアや国を捨てたベルカ出身の傭兵であり、奴等の乗るMiG-31はその加速性能を生かした一撃離脱戦法を得意

としていた。

そしてそれこそが、シュヴァルツェがエスケープキラーとして恐れられている最大の理由だった。

傭兵同士の戦い……

俺は、シュヴァルツェがそれを制すると思っていた。

そしてあの時空にいたベルカ空軍パイロットなら、誰もがそう思つただろう。

だが、その考えが間違つてゐることが証明されるのに時間はかからなかつた。

「全機……狩りを楽しむ余裕はねえぞー！」

ドミニク・ズボフの悲痛な叫びが無線の向こうで響き渡る。

既にシユバルツェ隊は半数が撃破され、あの鋭い機動は見る影も無く崩れ去る。

四羽のハゲ鷹は、二羽の鷺に追いたてられている。

そしてまた、俺の目の前で一羽のハゲ鷹が、鬼神の射線上に捉えられた。

そして、間髪入れずに放たれた一本のミサイル。

それは、大空の勇者達を無慈悲に叩き落とすS A A Mだった。

そのハゲ鷹は、回避行動を行う間も無く俺の目の中で爆散した。パイロットがベイルアウトをした風は無かった。

「何だ…このザマは。」

ドミニク・ズボフのその声は、最早力無い咳きだった。

それは、エスケープキラーとして畏怖の対象として軍に存在していた彼が初めて感じた恐怖だったんだろう。

そして、鬼神の圧倒的な強さを

ベル力最強のエスケープキラー達を軽々と葬るその姿に、俺は「」の中の闘争心を搔き立てられるのを感じた。

そして次の瞬間、俺は飛び込んでいた。

ハゲ鷹と鷺が描く、複雑な軌道の中へと。

そして

…

「気がつくと、俺は円卓の地面に横たわっていた。空を見上げると、あの鬼神が最後のハゲ鷹を落としたところだつた。」 そう言つて黄色の13は立ち上ると、部屋の窓を開けた。

太陽は西の空へ沈みかかっており、窓から見える景色は赤みを帯びていた。

「奴に落とされた時のことは覚えていない。気が付いたら叩き落とされていたからな。だが……」

そう言って、黄色の13は私たちの方へ体を向ける。

開け放された窓から入る光は逆光となり、彼の表情を覆い隠した。

「俺はその姿を見て、奴に嫉妬した。そして、言い様の無い感情を…怒り、憧れ、恐怖…様々な感情が混ぜ合わさったものを感じたんだ。」

フフ、と自嘲気味に笑う黄色の13を、私たちは只じつと見ていた。その顔が果たしてどの様な表情をしているのか、私達には伺い知ることは出来ない。

「俺は、同じく撃墜された味方のパイロットと一緒に基地まで歩いた。そして、再び大空の戦いに身を投じたが、奴と再び会うことは無かつた。」

フウと息を吐くと、黄色の13は窓を閉め自分が先程座っていたイスに座る。

「そして戦争は終わり、空軍パイロットはその大半が軍を追われた。だが、そんな俺達を拾ってくれる国も存在していた。」

オーシア

そう言って親指を立てる。

ユークトバニア

次に人差し指を

そして、エルジア

最後に中指を立てた。

「エルジアに招聘された俺は、アグレッサー部隊の隊長に就任した。
その部隊が、このアクイラ隊だ。」

「え……じゃあ元々黄色中隊は戦闘部隊じゃ無かつたってことです
か。」

あずにゃんの問いに黄色の1-3は「ああ。」と頷く。

「アクイラ隊は元々は戦技向上を目的とした教育部隊だったの。でも、ISAFとの戦端を開く際に高い鍛度を誇るアクイラ隊は放置できぬい存在だった。」

さわぢゃんが淡々と語り始める。

「1Jの戦争の初期に、エルジアがストーンヘンジを接收したのは知

つてるでしょ。」

私たちは頷く。

サンサルバシオンに進行したエルジア軍はストーンヘンジを接收。その強大な威力をもつてして、大陸の空を支配した。本来なら宇宙より飛来する筈の隕石を打ち砕くべく創られた希望の象徴は、大陸の空を支配する恐怖の象徴へ成り下がったのだ。

「当時ストーンヘンジを防衛していたＳＴＺ警備飛行隊は、エルジアのどの空軍パイロットよりも高い鍛度を誇っていたわ。特に隊長のジョン・ハーバードは各国を渡り歩いた名づけの傭兵だったの。」

「そのＳＴＺ警備飛行隊に対抗するために、黄色中隊は投入されたつて訳ですか。」

あずにゃんの言葉に、さわぢゃんは「ええ」と頷いた。

「もとが戦技向上の為のアグレッサー部隊だから、生徒にも優秀なパイロットが多かつたらしいわ。」

それが今のアクイラの礎なのよね、と言ひながらさわぢゃんは黄色の13を見る。

さわぢゃんの言葉を聞き、それを懐かしむよつた表情を見せる。スカイキッドで出会つたときの、冷徹な表情は微塵も感じさせない。そこに居るのは、“黄色の13”と呼ばれるエースではない。私の目の前には、只の一人の男性が座つていた。

「あの日、ＳＴｖ警備飛行隊との戦闘に参加した隊員で」の中隊に居るのは俺だけだ。」

突然の言葉に、私たちは目を丸くする。

「え……でも、この人たちは……」

ムギちゃんが中年准尉や若い下士官を交互に目で見る。しかしながら当の彼らは何も答えない。若い下士官に至っては目を横に逸らしている。

「あの准尉はその日は編制から漏れていた。サワコやあの若造はアクイラに在籍すらしていなかつた。」

中年准尉、むわちゃん、若い下士官の順に黄色の1-3は視線を移していく。

「ベテランは他の部隊に引き抜かれる。彼らも同様だつた。アクイラに居るなら、俺は戦場で彼らを救ひ出しが出来たが、他の隊に居るとなればそれは不可能だ。」

それって

りつちやんがそう口にしたとき、黄色の1-3は顔を上げる。その目はりつちやんを見つめると再び視線を落とした。

「ああ……彼らは、戦死した。」

と。

「生き残ったのは俺と、もう一人いる。そいつは幸運にも教育部隊の教官に任命された。」

君たちもよく知っているだらうと続ける。

私たちは互いに顔を見合させる。

私たちの知っている人に、そんな人物がいただらうか。だが、いたのだ。

予備士官学校の教官に

黄色の13をボスと呼ぶ人物が。

黄色の13が、生徒と読んだ教官が

「それって……ジャン・ルイ大尉のこと……」

私は黄色の13にそう問い合わせる。

その問い合わせに、黄色の13は口元を緩め、「ああ、正解だ。」と言つた。

「彼奴は優れたパイロットだった。技術は他の奴より頭一つ抜けていた。」……だが、と彼はそこで言葉を詰まらせた。

「貴方と反りが合わなかつたのよね。」

文化祭の演
と、わわちゃんが割つて入る。その口調はあの時
奏衣装を持つてくるときの少々意地悪げな笑みで。

「中隊間の連携を重んじる貴方と違つて、個人の技量を最重要視す
るジャン・ルイさんは犬猿の仲だつたのよね。」

フフフツと笑いながら言つたわちゃんの言葉と違つて、黄色の13
は少々困り果てた様子だ。

「個人の技量を重んじるエルジア空軍の風潮に、ベルカ空軍のやり
方は合わなかつたからな。ジャン・ルイは俺のことを、ベルカの亡
靈とまで言いやがつた。」

そう言つて薄く笑う黄色の13は、当時を懐かしんでいる様だつた。
今きつと、彼の頭の中を当時の光景が駆け巡つてゐるのだろう。

「ジャン・ルイ大尉は昔から何でもズケズケと言つてたんだなあ。」

と、りつちゃん。
何やら一人納得した様子だ。
だが、容易に想像できる。

ジャン・ルイ大尉の苛烈な性格に加え、あの夜の言葉

きっと、黄色の13とジャン・ルイ大尉　当時はジャン・ルイ生徒
だが　は度々衝突していたんだろう。

「あ、もう二時間じゃない。」

さわちやんが、自身の腕時計を見て少々驚いた声を上げる。

私もその声につられて窓の外を見ると、既に外は暗闇に包まれ、意地悪な冬将軍が寒い風を吹かせていた。

「もうそろ帰らないと不味いなあ。」

と、澪ちゃんが呟く。

確かにこれ以上長居は出来ない。

元々ジャン・ルイ大尉は、私達が黄色中隊の基地に行くことに賛成では無かつたし、生真面目なジーン中尉はきっと小言をいつに違いない。

「じゃあ、車で送つてとてあげるから……」

とさわちやんが言い終わる前に、あの若乙女士官が

「あ……自分が送ります。」

と言つた。

「あ、いいの。」

とのせわちやんの問いに対し、彼は「はい。」と言つた。

「そう……じゃあ任せるわね。」

とのせわちやんの声を聞くなり、彼は「了解。」と言いキャンピン
グトレーラーから出ていく。

私たちも彼の後を追いかけ外に出る。

辺りは窓から見たように真つ暗で、月明かりが滑走路の近くに置か
れた対空機銃を朧気に映し出していた。

空には星が瞬きをする。

そして、空を翔る一筋の光

「あ…流れ星だ。」

私の声に反応し、皆が夜空を見る。
だが、その光は既に消え失せていた。

流れ星は隕石の欠片が大気圏に突入したもの

そう学校で教わったことがある。

私たちにはその隕石の欠片に願いを託す。
それは滑稽なことじや無いだろつか。

私たちの平和を

日常を

奪い去つた戦争を引き起こした隕石、コリシーズ。

その欠片に、私たちは願いを託す。

もう一度、あの日常を

友達と笑いあつた放課後を、返してはくれないだろうか、と。

「あ、皆さん。こちらです。」

基地駐車場に行くと、大型のハンヴィーの前に立っている若い下士官が居た。

「サンプロフェッタ空港までお送りします。乗ってください。」

そう促され、私たちはハンヴィーに乗る。

基地のゲートが開けられ、夜の街をハンヴィーが走る。

「自分は、黄色の1-3があんに饒舌だと初めて知りました。」

ハンヴィーを運転しながら彼はそう呟く。

ジャン・ルイ大尉の様な荒っぽい運転ではなく、落ち着いた運転だった。

「いつも寡黙で物静かな黄色の1-3が、何故貴女達にあの様に自らの過去を話したのか……」

自分には分かりません、と続ける。

私たちは只それを聞いていた。

不意にハンヴィーが停止する。信号が赤の田を光らせていた。

「只、…自分から見た黄色の13は、何時もより楽しそうな気がしました。」

「楽しそう……ですか。」

あずにゃんがそう呟くと、若い下士官は「ええ、楽しそうでした。」と言った。

そんな話をしているうちに、私たちはサンプロフロッタ空港に着いた。

ゲートに着いたハンヴィーより若い下士官は顔を出し、歩哨に一言二言告げるとゲートが開く。

「それじゃあ、自分はこれで。失礼します。」

私たちをハンヴィーから降ろした若い下士官は、拳手敬礼を行つ。

私たちはそれを受礼すると、ハンヴィーは空港を後にした。

月明かりに負けぬ光を照らす管制塔。

滑走路を走る誘導灯に、夜空を翔る探照灯。

街の外れにあつた粗末な野戦滑走路とは違い、サンプロフェッタ空港は光に覆われていた。

この飛行場からは、星空は十分に見えない。

忙しなく動く探照灯や、夜間でもお構い無しに空を飛ぶ軍用機が邪魔をして星は隠れてしまつから。

でも、私はそれで構わない。

星が見えない　いや、星を見よつとも思わなければ、夜空の方が私は良い。

きっとその方が、あの恋まわしいコリシーズの流れ星を見なくて済むから。

「私な、よく流れ星を探してるんだ。」

私の気持ちを知つてか知らずか、澪ちゃんがそう言った。

私は横田に澪ちゃんを見る。

嫌味の一矢でも直つてやるつかと衝動を、ぐっと堪えながら。

「へえ、何をお願いするんですか。」

あずにはんの間じり、澪ちゃんは寂しげに笑いながら

「まあ、まだ叶わないこといつか……叶わないって分かってるんだ
けど、いつお願いしてる。」

もつ一度、歯とあの放課後を過ぎしたい
つて。」

澪ちゃんのその言葉に、私は自分が顔をしかめたのがわかった。
だが、あずにはんがじらじらを見て誇しげな顔をしたのを見て、必死
に偽りの笑顔を浮かべる。

「……大丈夫よ。きっと、またあの放課後を過ぎせるわ。」

ムギちゃんがそんな根拠もないことを言つて、りつちゃんとあずこ
やんも頷いた。

私もそれに続いて曖昧な返事をする。

だけど、心の中では思つてゐる。

流れ星に祈つたといひでせ、戦争は終わらないよ　ヒ。

もうお互いに必死なんだ。
エルジアも、ISAも。

どじらじらかが消えて無くなるまでこの戦争は終りない。

そんな血みどろの戦争が、流れ星に祈つたといひでじうなるといつて
のだひ‘’。

心中で悪態をつきながら私が空を見上げると、一筋の光が空を走
る。

流れ星だ。

これ見よがしに私の視界を走る流れ星に若干の怒りを抱きながら、
だけどもそれを隠しながら

「みんな、寒いから早く行け。」

と促す。

それを聞いた時は足早に空港内に向う。
それに続く私は再び空を見上げる。
何てことはない。

只、気になつただけだ。

夜空にはもう、流れ星は走らなかつた。

アクイーラ隊野戦滑走路！

唯達が若い下士官を追いかけてキャンピングトレーラーを後にする。
黄色の4こと山中さわ子は中年准尉に「少し席を外してくれない。」

と言い、彼を外に出した。

そして、一人だけの空間となつたキャンピングトレーラー内。先程
までの賑やかさの反動か、やけに静かだと山中さわ子は感じていた。

「で、俺に何か話があるのか。サワ」。

黄色の「3」とHーリッヒ・クリンスマントの言葉に、さわ子は微笑む。

それは、生徒であった平沢唯らに向ける笑顔とはまた違つたものだつた。

「あら、お互に愛し合つてる者同士が一人つきりになるには、何か話す話題が必要なわけかしら。」

そう言つと、フフフッと笑うさわ子は黄色の「3」に向けて

「冗談よ。」
と囁いた。

「……で、一体何のつもりなの。」

そう黄色の「3」に言い放つ彼女の目は先程とは違い、笑つていなかつた。

その鋭く光る目は、愛する者に向ける目では無い。

「あの話は、私だけにしかしないんじゃなかつたかしら……少し嫉妬しちゃうわ。」

その言葉を、黄色の「3」は只黙つて聞いている。
俯く彼の表情は、さわ子からは伺い知ることは出来ない。

「……歴史には、証人が必要だ。あの予備士官[り]も、知つておいて貰いたかったからな。」

「……貴方の過去を、かじり。」

さわ子の間に、黄色の一人は「ああ。」と返す。

「残念だけど、あの子達がこの戦争を生き延びないとそれは語り継がれないわよ。そして今のあの子達では絶対に生き延びられないわ。」

「

さわ子はそう述べる。

静かにゆっくりと、そり、それはまるで生徒を諭すような口調で。

「……それは心配要らない。彼女らはまだ予備士官学校に居る、前線へはまだ赴かない。それに……」

黄色の一人は上着のポケットより煙草を取り出す。

それをくわえ、火を着ける。

肺に煙を満たし、吐き出すと忽ち室内に煙草独特の匂いが充満する。

「もし彼女らが前線へ赴くな、お前が助けてやれば良い。安心しろ、転属願なら何時でも受け取るわ。」

そう言って下卑た笑いをする黄色の13。

「これは普段から『冗談を言わず寡黙な態度を崩さない彼なりの、精一杯のジョークだった。』

さわ子はそれを誰よりも理解していた。

だが、今は違う。

今は、そんなジョークを言つよつた場面では無いのだ。
怒鳴り付けたい衝動を、息を大きく吸い込み、そして吐き出すことで抑える。

これは高校教師時代からの癖。

そして、桜ヶ丘女子校の軽音部の顧問をしていた頃からの習慣だつた。

「……それは無理よ。」

さわ子の言葉に、黄色の13は少々驚いた様子だった。
くわえていた煙草を灰皿に擦り付ける。

「無理ということは無いだらつ。現にお前は、エルジア空軍のH-1スだ。お前と渡り合えるパイロットなんて、ISAFAには……」

そこまで言つて気付いた。

黄色の13の脳内を走るあの光景。

自分が率いる中隊機に、機銃弾を命中させたあのパイロット

蒼く広い空

まるであの日の円卓を彷彿させるかの様な、多数の戦闘機が入り乱れる「モナ島の上空」で、彼は見た。

嘗て自身が闘い、そして落とされたあの鬼神。

変幻自在に空を飛ぶあの鬼神の面影を持つパイロットを

「モナ島の空中戦に参加していた一人のエルジア軍空中管制官。

被弾した黄色中隊のパイロットが叫ぶように敵の確認を求める。

だが、多数の戦闘機が入り乱れる空での敵の確認は容易ではない。

だが、その管制官は其を見た。

黄色中隊機に機銃弾を命中させた一機のF-22……その機体に描かれた特徴的なシンボルを。

それはメビウスの輪と呼ばれるものだった。

だが、その管制官はそれを知らない。

そして彼が咄嗟に口走ったその呼称は、大陸戦争を通じてそのHIS AF軍パイロットの通り名となつた。

それは

「……リボンのエンブレム、か。」

リボンのエンブレム

落日のISAF陣営に颯爽と現れ後退していた戦線を復活させたパイロット。

後に大陸戦争最大の英雄と呼ばれるのだが、それはまだ先の話だ。

「ええ……あのパイロットが空を飛ぶ限り、私たちも安心出来ないわ。」

リグリー飛行場の奪還、無敵と言われたエイギル艦隊の封殺、コモナ島上空の空中戦……

ISAF軍の重要な戦闘にリボンのエンブレムは参加し、そして勝利を牽引してきた。

既にエルジア空軍のパイロットに、その名は轟いている。

「私……たまに思うのよ。もし、私とリボンのエンブレムが空で出会つたらどうなるのかってね。」

フフフと笑うが、その端整な顔は笑いきれていない。

その日は、寂しげだった。

さわ子は入り口へ向づ。

黄色の13はそれを止めようとはしない。

止めたところでかける言葉が見付からないからだ。

「……ねえ。」

ドアを開けようとしたときに、さわ子はそう呟いた。

「もし……私が死んだら、あの子達を守つてくれるかしら。」

「縁起でも無いな。やめてくれ。」

黄色の13はそのまま口に出す。

久しぶりに教え子と会つて弱気になつたか

彼はそう氣楽に構えていた。

だが、こちへ振り向いたさわ子の顔を見てそれが間違いだと思い知られる。

さわ子は、涙を流していた。

黄色中隊にさわ子が来て、涙を流す姿など一度も見たことが無い。否、以前屬た部隊においても、彼女が涙を流すなど聞いたことがなかつた。

「……わかつた、約束しよ。だからサワコ、氣を強く持て。」

空の戦いにおいて、氣弱になつたものは直ぐに落とされる。

黄色の13はそれを良く知つていた。

今さわ子が戦場に出れば、あつとこゝに落とされるとばかり。

「……あつがといふ。」めんなさこね、こんな姿見せやつといふ。
わわ子はやつぱりアーティアを開ける。

「……いや、いいんだ。」

黄色の13の声が届いたがどうかは分からぬ。

言ひ終わつたときには既にさわ子は出でていつた後だつた。

誰も居なくなつたキャンピングトレーラー内。

再びポケットに手を突っ込み、煙草を取り出す。

残り一本の煙草を惜しげもなくくわえ火を着けた。

彼の胸の奥底に漂つ一抹の不安。

さわ子があんなことを言つことなど今までに無かつた分余計に氣味が悪い。

煙草を吸えば氣が晴れるだらうと思つていたが、予想に反してその不安は増幅していった。

「……何もなければ良いがな。」

気がつけばそんな言葉が口から出ていた。

いつもならば雪の煙草も今口は不快に感じる。

こんな日はシャワーを浴びてからと寝るに限る。

そう思い立ち上がる。

カーテンを閉める為に窓に近付くと、空を走る一筋の光が見えた。

流れ星だ。

いつもならば何も感じ無い筈の流れ星に、今日は願わずにほいられない。

サワコ、何も無いよつた。

と。

オペレーション・ノアズアーク

2005年3月14日

コージア大陸東部の都市ロスカナス、その北西の丘陵地帯チヨピンブルグ上空を、自分は飛んでいる。

飛んでいるとは言つても実際に機体を操縦しているのはパイロットであり、自分は只この機体 E - 767 に乗つかつて居るだけの空中管制官に過ぎない。

しかも機体は交戦エリアより遙か後方を飛んでいる。
重鈍な警戒管制機であるこの機体は、後方より空中管制を行うのが与えられた役割なのだ。

交戦エリアに向かう機体は一機のF - 22だけである。

ISAF加盟国に亡命するストーンヘンジの技術者達とその家族を乗せた一機の民間機、それを護衛するためだ。

たつた一機で護衛なんて無謀すぎる

そんな声は誰からも聞こえなかつた。

当然だ。

その護衛機には、間違いなくF-15A-F最高のパイロットが乗つている。

そんな心配など、するだけ無駄なのだ。

彼と自分が初めて空で出合つたのが、今から半年前だ。

それ以来、何の縁かは知らないが彼の出撃するミッションの空中管制を自分が担当している。

自分は彼を相棒だと思つてゐるが、向こうはまづつ思つてゐるだらうか。

……まあ、そんなことは関係ない。

今は只、彼に情報を送るだけ。このミッション　ノアズアーク作戦　を遂行し、一機の民間機を無事に逃がすことだけを考える。

そつと言えば、彼は軍の情報部によると、アルジア軍の間ではある通り名で呼ばれているらしい。

それが何という通り名だったのかは忘れてしまったが……

「レーダーに反応。エアイクション機です。」

ギャレーから持ってきたサンドイッチを食べながらそんなことを自分が考えていると、隣の情報士官が叫ぶ。

自分はサンドイッチを食べるのを止め、慌てて民間航空エアイクション機への通信回線を開く。

「エアイクションへ。状況を説明していくださ。」

「「ひりりり」02便、エルジア軍機が高度23000で接近中！ 急いでくれ！」

無線の向こうで聞こえる叫び声。

空軍機に追い立てられたことの無い民間機パイロットには、今の状況は恐怖そのものだ。

「ひらり701便。離陸時に機長が負傷、副操縦士のナガセが操縦しています。」

女性パイロットの声だ。

一見、先のパイロットとは対照的に落ち着いている様に聞こえる。

説明された状況は決して芳しくない。

だが自分は焦らない……否、焦つてはいけないので。焦りはミスを誘つ。

この戦いでは、小さなミスも命取りだ。

そして何より、焦りは不安を産み不安は伝染する。

落ち着け

息を大きく吸い込み、そして吐く。

味方が敵と交戦する直前は、これをしないと落ち着かない。

今までに何百回とやつてきた習慣。

頭がクリアになる。

大丈夫だ。

護衛は自分が最も信頼する相棒だ。

今回もきっと成功する。今までの//シヨンと同じように……

不安と焦りを頭から払い、エアイクションへ伝える。

「了解。護衛機が行きます。両機とも、進路を維持してください。」

そして、我が相棒へ

「メビウス1、こちらスカイアイ。エアイクション機にエルジア空軍機が高度23000で接近中。交戦を許可する、エアイクションをやがらせるな。」

無線の向こうから「了解。」と機械的に返事がなされる。

彼と初めて出会ったときからそれは変わらない。

「メビウス1、エアイクシオン機へ接近中。」

「エルジア空軍機、エアイクシオンへ接近します。」

情報士官が次々に叫ぶその声を、自分はただ黙つて聞いている。

大丈夫。

きつと直ぐに、あの報告がなされる。

今まで飽きるほど聞いた、あの報告が。

「メビウス1、FOX2。」

そらきた。

なら、あの報告も直ぐだろひ。

「メリウスー、敵機撃墜。」

レーダーに映つていた敵機の反応が消える。

この光景は今までに何十回と見てきた。

彼と初めて空を飛んだときから何一つ変わらない。

それと同時に、機内に安堵の空気が流れる。

しかしそれは、一つの叫びにより引き裂かれた。

「エルジア空軍機、高度6000で接近中。一機います。」

直ぐに彼へそれを伝える。

「メビウス1、新たな敵機を捕捉。高度6000で701便に接近中。」

返答は無い。理解したのかしてないのか、それすらも不明だ。だが、それは今まで同じだ。そして、それで成功してきた。今回も必ず成功する。

自分はそう信じている。

そしてその時、フと頭を過る記憶

仲の良い情報部の同期から聞いた話を、自分は思い出す。

ああそうだ。

思い出した。

今、敵と戦っている彼は確か、エルジア軍の間ではこう呼ばれていたんだ。

なかなか素敵な通り名じゃないか。

あいつが無事にこのミッションを遂行して帰つて来たなら、聞かせてやらないといけない。

レーダーには、交戦エリヤより退避する一機のエアイクションとそれを撃墜せんとする一機のエルジア軍機。

そして、エルジア軍機に向かう一機のF-22が写っている。

「民間機を護衛しながら複数の敵と交戦なんて……」

誰かがそう呟く。

大丈夫だ。

彼は不可能とも思える作戦に何度も参加し、そして勝利を牽引してきた。

そしてそれは今回も変わらない。

任せたぞ、相棒

ばんがいへん、了！

すとーんへんじゅうじゅう…！

2005年4月1日

黄色中隊の野戦滑走路に初めて行った日から、私たちは訓練の無い日を見計りつてはさわちやんに会いに行っていた。

昼は黄色中隊の野戦滑走路、夜はスカイキッドに入り浸る。

自然、中隊隊員やスカイキッドの従業員とも仲良くなっていた。

「ん～君はいつも暖かだねえ。」

4月とはいえ風が僅かに肌寒く感じる今日この頃、私たちは相変わらず黄色中隊の野戦滑走路に訪れていた。

私が野戦滑走路に住み着いている犬を抱き抱え頬擦りをしていると、我が愛しの後輩がジツと見つめていた。

「あれえ、あずにゃんも頬擦りして欲しいのかな。」

少々嫌味な笑みを浮かべてそう問うと、彼女は頬を赤らめて拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

それを見て、皆はクスクスと笑う。

「なんかさ、いつやつてるとあの軽音部のときみたいだな。」
りつちやんはそう呟いた。

そう。

さわぢやんと再開してから、私たちには再び笑顔が戻ってきた。

軽音部の部員と顧問が再び出会つ。

それにより、私達が軽音部の気分を取り戻すのに時間はかからなかつた。

あの放課後の、皆で笑いあつたあの光景が少しづつ蘇る。

戦争で失つた時間を少しづつ取り戻すかのように

だが、私たちが笑いあつているのと時を同じくして、戦いの火の粉は少しづつサンサルバシオンに近付いてきていた。

3月14日……私達が「今日はホワイトデーだね。」

なんて浮かれていたその日、ストーンヘンジの科学者達が民間航空機を使ってISAF加盟国に亡命する事件が起きた。

追撃するエルジア空軍機を撃退したのは、あの名高いリボンのエンブレムの戦闘機だそうだ。

そして、大陸に配置されたエルジアの諸部隊は来るべきISAF軍との戦闘に備えていた。

それはサンサルバシオン方面軍も違ひは無く、前線より敗走する諸部隊を取り込み兵力を拡大していた。

上空を飛び交う戦闘ヘリは官庁街の静けさを吹き飛ばし、ビルの屋上に設置される高射砲は日増しにその数を増やしていく。この町を目指し、ISAF軍が近付いてくる。

だけど私たちはそれをどこか他人事のように考へ、呑気に毎日を過ごしていた。

「申し訳有りません。」

滑走路の一角で犬とじやれ会う私たちに声がかけられる。

私達がそちらを向くと、中隊の衛兵が立っていた。

「黄色の4は現在予備機材の確認をしております。時間がかかりますので、もう少々お待ちください。」

申し訳なさうにうづうづ告げる衛兵に対してムギちゃんは

「いえ、突然押し掛けた私たちに非があります。お気になさらず。」

と返した。

衛兵は私たちに一礼するとその場を立ち去る。

いつもと変わらない光景。

その筈だった。

突然そこから爆発音がしたかと思つと、黒煙が空に向かつて立ち上る。

私が抱き抱えていた犬がそれに驚き飛ぶように逃げていく。

私たちが何事かと思つて立ち上ると、黄色中隊の隊員が大急ぎで予備機材庫に向かつて走つて行く。

私たちは、それをただ呆然と見ていた。

そして、りつちゃんが青い顔をしながら呟く。

「……なあ、さわぢゃんてさ。今……ビンゴに歸るんだ。」

と。

私たちは一瞬その質問の意味が理解できなかつた。

だけど、それを理解した者はりつちゃんと同様に顔を真っ青にした。

もちろん私もその意味がわかった。

顔から血の気が引くのがわかる。

やうだみ、さわせやんは今

あやじこーる。

あの煙の立つ場所に、彼女はいるんだ。

私の足は段々速度を上げる。

恐らく私がここまで速く走ることはないから的人生で無いだろ。

それくらい、私は焦っていた。

何に焦っていたか

さわちやんを失うこと。

それもある。

だが、正確には違う。

私が一番恐れていたこと。

それは、今ある日常を失つこと だった。

さわちやんを失つことで、皆が再び笑顔を失うかもしれない。

そうすれば、今私の手の中にある日常というなの青い鳥は、また私から遠ざかる。今又それを失えば、再び戻つてくることは無い

私は、それを恐れたのだ。

だからこそ私は走った。

さわやかが連続でいることを確認するため。

そして

まだ私の手の中へ、青い鳥が居ることを確認するため

私は彼女の元へ走った。

そして

……
…

私はさわちやんを見た。

衛生兵に支えながら歩くさわちやんは、右手を負傷していた。

私を見つけて悪戯気に舌を出して笑っていたが、その顔は痛みに耐えきれずに歪んでいたのを……私は覚えている。

その後、皆が私に追いかける。

私にさわちやんの様子を聞き、皆一様に表情を暗くした。

澪ちゃんは“血”に反応し青白い顔をしていた。

その時、私たちの背後から声がかけられる。

あの中年准尉だった。

聞けば予備機材庫に爆発物が仕掛けられていたらしく、安全のために退避せよとのことだった。

私たちはそれを聞き、重い足取りで野戦滑走路より待避した。

向かう先はサンプロフュッタ空港の予備士官宿舎。この街での、私たちの居場所だった。

「いつちやんが酷く激昂していたのを覚えてる。

「さわちやんを怪我させた奴をぶちのめしてやる。」

やつ狂高に叫んでいた。

澪ちゃんもギちゃんも始終暗い顔をしていた。

「さわちやん……大丈夫なのかな。」

と澪ちゃんは呟いていた。

あすにやんは俯き、何かを考えている様子だった。
じつと下を向き、表情が見えない。

そして顔を上げ

「このサンサルバシオンにも、レジスタンスが居たんですね……」

と並べ。

レジスタンス

エルジアの支配に反発する民衆が組織した抵抗勢力。

表向きエルジアに協力する素振りを見せり市民が見せる、裏の顔……

ISAF軍に通じサンサルバシオン攻撃の手引きをしているといつ
噂も、方面軍の間で流れていた。

私は改めて感じた。

戦争といつもの。

私たちはさわちやんと再開して、高校時代と変わらぬ毎日が少しでも帰ってきたのではと喜んでいた。

しかし、何てことは無かつた。

私たちは忘れていたのだ。

自分達が、戦争の真つ只中に居ることを。

この、一見平和気なサンサルバシオンの市民の中には、私たちに牙を向けるとするレジスタンスが居ることを

その様な事など知らずに、只へラヘラと笑いながら過ごしていたなんて……

全く、笑つてしまひよ……

私の手のひらの青い鳥は、もつ居なかつた。

いや

もともと私は、青い鳥なんて捕まえていなかつたんだ。

私は、幻を見て安心していたんだ

あの、キラキラと輝く高校生活……

それが少しでも返つてきているのではないか。

そんな幻を、私は見ていたんだ。

…

…

2005年4月2日

私たち五人は、黄色中隊の野戦滑走路に居た。

普段は平穏げな雰囲気の野戦滑走路のゲートは、今日は大勢の歩哨が立っていた。

彼らは皆、昨日の“あの時”までは野戦滑走路内で仮染めの平和を享受していた筈だった。

だけど、それはあの時

あの爆発で打ち崩されたんだ。

ゲートをくぐり敷地内に入るとき、私はチラリと歩哨の顔を見た。

いつもの朗らかな笑顔は消え、顔の表情筋を強張らせている。

この部隊にも、戦争が近付いてきているんだ。

私はそんなことを考えながら野戦滑走路内を歩く。

皆は一様に無表情だ。

澪ちゃんは俯き加減で、その表情は自慢の長い黒髪で隠れてしまっている。

いつもは元気で皆のマークメーカー的存在のりりちゃんと、まるでフランス人形の様な可愛らしい顔立ちのムギちゃん……この二人も表情は暗い。

あずにゃんもいつもの威勢は消えてしまい、正しく“借りてきた猫”の様にショボくれていた。

特に、いつもは私と悪ふざけをして場の雰囲気を和ませる存在のりりちゃんが黙り込んでいることが、今回の事態が私たちにとって大きな精神的ダメージであることを再認識させた。

結局さわちゃんの届くキャンピングトレーラーの前に着くまで、誰一人口を開くことはなかった。

空は曽らしこぼじ澄み渡つている。

雲一つ無い青空とは裏腹に、私たちの心は重く沈んでいた。

セーラー服に着替えた、私たちがやがて使うキャラバンングトレーラーに着いた。

「つむなりまつりやんがドアを勢い良く開けるのだが、今日せめうつよつとしない。」

「おこ……澪、ドア開けてくんないか。」

「え、私がか……。」

いつもやんの申し出、もともと痛いとや怖いことに対しての抵抗が人一倍大きい澪ちゃんは、扉を開けることにあからさまに嫌な顔をした。

氣の弱い澪ちゃんは、その端正な顔を不快に歪めていつもちゃんと対して精一杯の抵抗をする。

いつもやんはそれに負けたのか、やれやれとこつた様子でキャラバンピングトレーラーの扉に近付いた。

いつもやんが手を伸ばす。

その指先が扉に触れるその瞬間、扉が勢い良く内側より開かれた。

「こいつ……な、なんだあ。」

カチューシャをつけて前髪を上げているつちやんは、おでこが丸見えだった。

そのつちやんのトレーデマークとも言えるおでこ、キヤンペングトレーラーのアルミ製の扉が直撃したのだ。

そして、扉が開かれた向こう側より覗く顔。

「貴女達、どうしたのよ。」

それは私たちの突然の訪問に驚くわちやんだった。

「なんだ……そうだったの。」

その後私たちは、わちやんに今日の訪問の理由を告げた。

わちやんは、昨日怪我した左腕をわざと見せた。

「火傷よ。後が残るらしくけどね……」

包帯にぐるぐる巻きにされた前腕は痛々しい。

澪ちゃんは顔を青白くさせている。

「まあ、さわちやんの座我がそこまで酷くないなら良かつたな……」

「わちやんのその言葉に、さわちやんは苦笑こをした。

「まあ……私は大丈夫なんだけどね。」

そういつてわちやんが見つめむ窓の先には、俺退壕がある。

高速道路のトンネルをりょうじたお粗末な掩体壕。

その中に、それはあつた。

「これが……黄色中隊の機体。」

わたしの弦きは、掩体壕の暗闇に吸い込まれた。

主翼の先端と尾翼を黄色く塗装し、さわちやんのホールサインのナンバーである「4」を尾翼にペイントしたSU-37。

黄色い旋風として戦場を駆け抜けた筈の機体は……大空を自由に羽ばたく筈の黄色い荒鷺は、今は地上の薄暗い壕の中で縮こまっていた。

「エンジンが調子悪くてね……昨日取り替える予定だつたんだけど。

そこまで言われたら、後は私にもわかる。

昨日の爆発で予備エンジンは全滅したんだろう、

そして心臓に爆弾を抱えたこの機体は、大空に羽ばたく事なく地上で羽を休めている。

「パイロットは大丈夫だけど、機体が不調だなんて……笑っちゃうわよ。」

そう言ってケラケラと笑うをわちゃんは、いつもの笑い顔になっていた。

私たちはその顔を見て安堵する。

ああ、やつぱりいつもさわちゃんだ。大丈夫。

私たちは互いに顔を見合せた。

「じゃあ、私は戻るわね。今日はありがと。」

さわちやんはまじかにキャンピングトレーラーに帰つていった。

私たちはそれを見届けると、じつちやんの「帰らうか。」といふ言葉に頷き、野戦滑走路のゲートに向かい足を進めた。

さわちやんは無事だつた。

この事実が私たちをどれだけ安心させただらつか。

じつちやんや雰ちゃん、ムギちゃんは顔を綻ばせている。いつもは仮面のあずこちゃんも、今は標準穩やかだ。

来るとときは、まるでお葬式の様な空気が私たちを取り巻いていたが、それは冬と春の境目に吹く冷たい風に吹き飛ばされた。

今私たちは、春を待ち焦がれる花の蕾の様な気分だった。

だが、それは容易く打ち砕かれた。

あまりにも容易く、まるで、ストーンヘンジが大空を飛ぶ飛行機を撃ち落とすかの様に。

私たちがゲートを通り直前に、甲高いサイレンの音が空気を震わせ

た。

「な……何だ、これ。」

りつけやんや憑ちやんは身体を強張らせて辺りを見回す。

「これは……空襲警報、ですかね。」

あずにゃんはそう私に問い合わせるが、私に分かる筈はない。

私はただ、首を横に振るだけだった。

私たちの後ろ 野戦滑走路では、中隊関係者の怒号と大勢の人間の走り回る音がしている。

その異様に、私たちは圧倒された。

「これは一体、何なんですか。」

ムギちゃんは、冷静にゲートの歩哨に聞いている。

例え何があるつとも持ち場を離れるな、とでも言われているのだろうか。

野戦滑走路内の兵士達が走り回っているのに対し、今私たちの前に居る歩哨は整然とゲートの前に立っている。

「これは、ストーンヘンジの空襲警報です。」

ストーンヘンジの空襲警報

整然とした姿勢で、落ち着いた口調で、彼の口からその言葉が発せられた。

それを聞いた私たちの顔は、どの様になつていただろうか。

だけど、それを知る目の前の歩哨はただ話し続ける。

「ストーンヘンジにISAF軍航空隊が接近した場合、この空襲警報が発令されます。その場合は、黄色の13が列機を率いて出撃します。」

出撃

その言葉を聞いた瞬間、私たちは走り出していた。

後ろから歩哨が何かを叫んだが、そんなことはお構い無しだ。

私たちの目的地は一つしかない。

さわちやんのキャンピングトレーラーだ。

以前、さわちやんから「つ聞いたことがある。

私はね、黄色中隊の一一番機として一度も編制割りから外れた事がないのよ。これは私の誇りな

と。

そいつは『戻』に話していたさわちやんの事だ。

もし自分が編制から外されていたら、黄色の1・3に出撃させるように捩じ込むだろ？。

そんなことはさせない。

負傷し、更に愛機はエンジンにトラブルを抱えている。

そんな状態では死に行くよつなものなんだ。

私たちは只走った。

さわちやんの元へ向かうために。

だが、それは間に合わなかつた。

「あ……」と、つわちやんの声が聞こえる。

私が空を見上げると、一機のフランカーが青空に飛び立つていた。

機体の尾翼には黄色く「13」の数字。

そして、それに続くように空に身をやつすフランカー。

尾翼に描かれた数字は「4」

さわちやんだ。

しかし、それが分かつた所で私たちには何も出来ない。

只、彼女の身を案じることしか

負傷した体で

エンジンが不調の機体を駆る

彼女が無事に帰つてくるように、祈ることしか出来ない。

大空は青く澄み渡つている。

その空を吹き抜ける黄色い一陣の旋風。

大気を切り裂くその黄色い翼は、この日は鋭さが無かつた。

2005年4月2日1000

「これまで多くの英雄がストーンヘンジによつて散つていった。そろそろ新しい英雄が必要だ。全機、必ず生き残れよ。」

自分のこの言葉が終わると、無線の向こから「了解」という言葉が幾つも返ってきた。

この日、IASAF軍司令部はストーンヘンジに第一次航空攻撃を行った。

前回の航空攻撃は、黄色中隊によつて阻まれ前線司令部ロスカナスは陥落。

最果ての東洋の島国ノースポイントまで後退したのだ。

だが、我々は帰ってきた。

幾つもの困難を跳ね返し、この大陸へ

今、自分の眼前のレーダーに映る機影達はIASAF軍の精銳達だ。

その中に、勿論彼も居る。

自分の最も信頼する、相棒も。

ノアズアーク作戦は無事に成功し、二機のエアイクシオン機に分乗していたストーンヘンジの科学者達は無事にIASAF加盟国に亡命することができた。

そして彼等から譲り受けたもの　　ストーンヘンジの技術情報により、我々を大陸から追い出した八つの超巨大レールガンは丸裸となつた。

「スカイアイより全機へ。ストーンヘンジは環状に八つの砲塔が並んでいる。その砲塔の中心部には、ミサイル誘導を阻害するジャミング施設が設置されている。」

これは、彼等から譲り受けた情報の一部分だ。

「スカイアイへ、二九九レーピア三。ジャミング施設は爆弾投下で破壊ということか。」

「やうだ。ジャミング施設に接近し、無誘導性兵器を使用し破壊せよ。」

イカれてるぜ、という声が無線の向こうから聞こえた。

だが、自分はそれに反論しない。
イカれた作戦だと言つことは、このE-767の乗員も百も承知なのだ。

事前のブリーフィングでも、参謀の一人が言った。

司令部は、40%の損失を覚悟している。

と。

オペレーション・ストーンクラッシュ

2005年4月2日1000

サンサルバシオン南西部

ストーンヘンジより20マイル地点

「これまで多くの英雄がストーンヘンジによつて散つていった。そろそろ新しい英雄が必要だ。全機、必ず生き残れよ。」

自分のこの言葉が終わると、無線の向こうから「了解」という言葉が幾つも返ってきた。

この日、HSAF軍司令部はストーンヘンジに第一次航空攻撃
ストーンクラッシュ・シャー作戦 を敢行。

前回の航空攻撃は、黄色中隊によつて阻まれ前線司令部ロスカナスは陥落。

最果ての東洋の島国ノース・ポイントまで後退したのだ。

だが、我々は帰つてきた。幾つもの困難を跳ね返し、この大陸へ

そして今、自分の眼前のレーダーに映る機影達はISAF軍の精銳達だ。

その中に、勿論彼も居る。

自分の最も信頼する、相棒も。

前回のノアズアーク作戦は無事に成功し、一機のエアイクシオン機に分乗していたストーンヘンジの科学者達は無事にISAF加盟国に亡命することができた。

そして彼等から亡命の見返りとして譲り受けたもの
ストーンヘンジの技術情報により、我々を大陸から追い出した八つの超巨大レールガンは丸裸となつた。

「スカイアイより全機へ。ストーンヘンジは環状に八つの砲塔が並んでいる。砲塔の描く環の中心には、ミサイル誘導を阻害するジャミング施設が設置されているとのことだ。」

これは、彼等から譲り受けた情報の一部分だ。

「スカイアイへ、こちらレイピア。ミサイル誘導が阻害されると
いうことは、ジャミング施設は無誘導性兵器で破壊しき、といふことか。」

「やつだ。ジャミング施設に接近し、無誘導性兵器を使用し破壊せよ。」

イカれてるぜ、といつレイピアの声が無線の向こうから聞こえた。

だが、自分はそれに反論しない。

イカれた作戦だと言つことは自分も含め、このE-767の乗員も百も承知なのだ。

事前のブリーフィングでも、参謀の一人が言った。

司令部は、40%の損失を覚悟している。

と。

この作戦は過酷だ。

だが、勝利の為には避けては通れない。

エルジアに打ち勝ち、ヨージア大陸に再び平和をもたらす為には、この作戦を成功させなければならないのだ。

いつもの通りに息を大きく吸い込み、そして吐く。

だが、今日ばかりは頭がクリアには成らない。

口渴が酷い。

いつも以上に緊張している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075w/>

めがりす！！

2011年11月23日20時51分発行